

2. 日露戦争時の戦場で偵察用に作製・使用されたと推定される地図について

金 美英（大阪大学・院生）

編集者の注

長岡正利氏（現日本地図センター）より、日露戦争の戦場で描かれたと考えられる地図がインターネットオークションにでているとのメールをいただいたのは2007年10月のことであった。早速サイトを確認し、サンプル画像をみたが、どのように考えるか最初はとまどった。画像からすると、たしかに戦争の現場で作製された地図のようにみえる。しかし、そうした地図がこのような売られ方をするのだろうかという疑問がわく。その一方で、この種の地図も外邦図の一つであることに気づく。さらに、関連する報告は知る限りほとんどなく、しっかり性格を検討すれば、興味ある学術資料となる可能性があると考えられるにいった。ともあれ、まず入手して、現物を見ることから始める以外にない。

問題は価格である。この種の地図は古書店のカタログに出ることはまずなく、市場価格がわからない。そうした地図について、確実に入手でき、しかもできるだけ低い価格を考えるというのは、難しいことである。また科学研究費をつかって、こうしたオークションで地図を購入するという自体もはじめてのことである。

何とか落札でき、現物が到着してさっそく確認したところ、作製者（軍人）の名前や位階、作成年月日がいっているものがいくつかあり、その性格を判断する手がかりは少なくないことが判明した。こうした地図を大阪大学文学研究科人文地理学専門分野の大学院生に話したところ、中国人留学生の金美英さんが取り組んでみたいということになった。金さんは博士前期課程に在学中で、当時の軍人用の測量術書や『明治卅七八年日露戦史』など関係資料を参照して検討した結果を修士論文として提出した。吉林省の朝鮮族出身の金さんは、地図に描かれた地域をのちに作製された地形図と対照するだけでなく、『明治卅七八年日露戦史』の記載によって、これが作製された状況を確認し、軍人用の測量術書を参考に測量の方法についても検討した。また朝鮮語・日本語だけでなく中国語もできる金さんは、地図にみえる地名表記も検討することとなった。この作業のおかげで、これらの図は、日露戦争の戦場で作製され、使用された図と考えてさしつかえないことが明らかになったのは大きな成果である。

この原稿は、金さんの修士論文「日露戦争の戦場で作製・使用された地図について」のうち、とくに地図の特色の検討部分を速報的に示そうとするものである。地図の画像にくわえ、それが描く場所に対応する地形図、各種資料からわかる留意点を示している。この種の地図の検討は始まったばかりであり、地図の見方や分析法もこれから考える必要がある。この報告を読まれる方には、地図をよくご覧いただき、ご意見やコメントなどあればお知らせいただきたい。この報告は、今までほとんど知られることのなかったこの種の外邦図に関する最初の検討なのである。

なお、印刷用の原稿作成にあたっては、金さん執筆の原稿をわかりやすくするために、若干の修正を加え、さらに金さんが修正をくわえたことを付記しておきたい。

また、ここに印刷する図はモノクロで細部についてはわからない点が多い。カラー版については、下記の URL からご覧いただきたい。

外邦図研究プロジェクト <http://www.let.osaka-u.ac.jp/geography/gaihouzu/>

（小林 茂）

I. はじめに

日露戦争当時、地理情報の少ない戦地について、日本軍は地図の整備に努めた。この地域について日本軍は、すでに 1880 年代に行われた陸軍将校の実測によるもの（縮尺 20 万分の 1 で、その多くは「路上測図」によったと考えられる、山近・渡辺 [2008]、小林ほか [2008] 参照）や日清戦争を契機として編成された臨時測図部（第 1 次）作製の地図などを整備していたが、地図情報はなお大きく不足していたと考えられる。

日本軍が戦地で整備しようとしていた地図は、大きく分けて以下の 3 種類に分けることができる。一つめは臨時測図部（第 2 次）によるものである。日清戦争時に編成された臨時測図部は、日露戦争時にも編成され、陸地測量部の技術者を中心とした測量を行った。ただしここで注意しておかねばならないのは、臨時測図部の測量は、戦闘が行われている前線の地域ではなく、その後方のより安全な地域を対象としており（野坂ほか 1944 ; 小林 2009）、むしろ将来また戦場となる地域の地図作製をめざすものであった点である。二つめは、「分捕地図」といわれるもので、ロシア軍の将校が携帯していた地図を捕獲したものである。こうした地図については、日露戦争に従軍した将校である多門二郎の『日露戦争日記』（多門 2004: 84, 254, 288）にもしばしば登場する。前線だけでなくロシア軍の支配する後方地域についても貴重な情報をもたらすので、戦場に残されたロシア軍の地図資料は積極的に探索された。三つめは前線の戦闘地域について、将校や下士官によって作製された地図である。前線の地形や集落、道路などを簡略に記載するもので、偵察によって作製されたと考えられる。1905 年 4 月に下士官に昇任し、分隊長となった新潟県出身の茂沢祐作 (1881-1946) は、その日露戦争従軍記のなかで、偵察に際し「記憶測図」を行い、また宿営地の「路上測図」を行ったほか、前線の衛兵所勤務の報告として略図を提出したと述べている（茂沢 2005: 207, 210, 211）。本報告で検討する地図の多くは、こうして将校や下士官によって作製されたと思われるが、図に記入されている作製者の位階はいずれも将校である。また、一部に

臨時測図部が作製したと考えられるものもみられる。なお、上記茂沢の従軍記には、地図の「謄写」作業にふれる箇所が散見し（茂沢 2005: 61, 91, 111）、これが戦場の部隊の日常業務の一つであったこともうかがえる。

将校や下士官による戦場での地図作製を考えるに際し、まず留意されるのは、彼らがもっていた測量技術である。明治維新以後、陸軍将校あるいはその候補者が地形や測量に関する知識や技術を習得することにむけて、測図教育用の書物が出版されている。これらの書物のうち、国立国会図書館に所蔵され、日露戦争以前に発行されたものだけで 33 冊が確認される（表 1）。その内容から、戦場あるいは将来戦場となると予想される地域で行う、迅速かつ簡易な測量に関する教程あるいは参考書であることがわかる。この中で最初に発行されたのは、英語の原本の漢訳をさらに和訳した『行軍測繪』（1876 [明治 9] 年）である（小林・渡辺 [2008] 参照）。陸軍将校はこれらの書物をもとに演習を行い、測図の技術を身につけた後、自ら地図を作製したと推測できる。

また日露戦争当時、専門的技術を習得している将校や下士官について、これを役立てることが奨励されており、その中に「測量製圖に關する業務」が含まれている点も留意される（陸軍大臣寺内正毅 1904）。兵器や火薬の製造、鉄道の建設や電信に関する業務とともに、地図作製についても専門技術をもつ者の動員がはかられていた。

将校や下士官による簡易な測図法については「迅速測図」、「路上測図」、「目算測図」、「記憶測図」などの名称がある。この具体的な内容や使用された測量器具については、今後さらに検討する必要があるが、現在のところ、「迅速測図」は基本的に平板測量によるもの（陸軍省 1893: 251-254）、「路上測図」は画板のような携帯測板上に貼り付けた方眼紙に、コンパスおよび歩測ではかった通過経路の方位および距離を記入していくもの、さらに「目算測図」は現場でのスケッチによるものと考えられる。白幡（1892: 87）では、閉合するかたちで導線法を適用して測量した測点に囲まれた地域について、これを目印にスケッチにより地物の位置を記入する方法をさして「目算測圖」という語を用いている。戦場では、

こうした測点を設定すること自体困難で、ほとんどはそれなしのスケッチであったと考えられる。「記憶測図」は、現場でスケッチをおこなう余裕もない状態で地形などの観察を行い、安全な場所にもどってから記憶により作図する場合をさしていると考えられる。精度の高い測量には、時間をかける必要があり、また精密な測量器械も必要である。日々変化する

る戦場では、簡略な「目算測図」のような方法に頼らざるをえなかった場合が多いと考えられる。

なお、その他の測量法の名称として、臨時測図部の行った「碎（細）部測圖」、「線路測圖」がある。両者とも平板測量を主体とし、後者はそれによるトラバース測量をさすと考えられる。

表 1. 日露戦争以前における兵用測量書

No.	書名	発行年	著者	発行
1	行軍測繪	1876 (M9)	陸軍文庫	陸軍文庫
2	兵要測量軌典小地測量之部	1881(M14)	陸軍文庫	陸軍文庫
3	陸軍省年報 第 7,8 年報	1881,1883 (M14,16)	陸軍省	陸軍省
4	測繪活用	1882(M15)	著者不明	出版社不明
5	山地路上測圖活用法	1886(M19)	歩兵中尉生田清範	小松隆範
6	測量教科書巻 1~3	1887~1888 (M20~M21)	ウィルリヤム・ギレス ピー著 野村龍太郎・原龍太抄 翻訳	攻玉社
7	兵要迅測圖指針	1888(M21)	中島康直	内外兵事新聞局
8	軍人讀本	1889(M22)	河井源蔵著	有則軒
9	工兵操典 巻 10 (測地之部)	1889(M22)	陸軍省	川流堂
10	實用測量新書	1890(M23)	横山彦次郎, 小瀬佳太郎	内田正義
11	野戰砲兵下士野戰教程	1891 (M24)	著者不明	兵林館
12	歩兵軍事一斑 第 2 冊	1892 (M25)	上野勘次郎編	上野勘次郎
13	簡易測圖法	1892(M25)	白幡郁之助編	千城社
14	歩兵野外勤務 第 3 冊 路上測圖ノ部	1892 (M25)	河井源蔵編	有則軒
15	工兵操典 第 5 冊 7 編	1893(M26)	陸軍省	川流堂
16	兵要集	1894(M27)	神代賤身編	神代賤身
17	速成測量學	1895(M28)	城豪編	城豪
18	兵卒教授書	1896(M29)	余語征信	近藤喜保
19	歩兵軍事摘要	1896 (M29)	福田力之助編	東崖堂
20	野戰砲兵野戰教程	1896 (M29)	著者不明	兵林館

21	地形學教程 第3版 卷1-3	1896(M29)	陸軍士官学校編	陸軍士官学校
22	戦術綱要 2版	1898(M31)	軍事鴻究学会	有則軒
23	地形測圖法式草案 經常測圖ノ部	1899(M32)	陸軍参謀本部 陸地測量部	偕行社
24	田名部近傍路上測圖	1900(M33)	歩兵第五聯隊	歩兵第五聯隊
25	一年志願兵志望者 必携軍事學大要	1900(M33)	広嶺忠胤著	広嶺忠胤著
26	測圖學教程	1900(M33)	教育総監部	教育総監部
27	地形測圖法式	1900(M33)	陸軍参謀本部 陸地測量部	陸軍参謀本部 陸地測量部
28	略測圖教科書	1900(M33)	本間資鉄編	小林又七
29	軍隊學術幹部須知 下巻	1902(M35)	陸軍歩兵少尉 宮本林治殿編	鐘美堂
30	測圖学教程	1903(M36)	教育総監部	教育総監部
31	幹部必携測圖指針	1903(M36)	沢木外雄著	川流堂
32	戦地測繪	出刊年不明	参謀本部	参謀本部
33	路上測圖教程 (大阪大学所蔵)	出刊年不明	著者不明	発行者不明

注：国立国会図書館の近代デジタルライブラリー (<http://kindai.ndl.go.jp>) をもとに作成 (M：明治)。

II. 本図群の概要

つぎに、大阪大学がインターネットのオークションで購入した地図群 (以下本図群とする) について検討する。日露戦争の戦場で作製・使用されたと思われる本図群 (大阪大学文学研究科人文地理研究室所蔵) のそれぞれが、いつ、どの作戦のために、どのような方法で作製されたのか、などについて分析を試みたい。

本図群の構成は表2の通りである。各図の名称には、「略圖」、「目筈並記臆測圖」のようなものがみられ、緊迫度を増す戦場において、簡単な測量器械を利用して短期間にスピーディに作製されたことがうかがわれる。ほとんどが簡略な地図であることも、これに一致する。他に⑪「威遠堡門」(秘)、⑫「昌図」(秘) など、標高点の記入をとまなう、より本格的な測量によって作製されたことが明らかな地図もある。

本図群にあらわれる地名が示している場所は、現中国遼寧省 (旧奉天省) 鉄嶺市の昌図県、開原市、西豊 (掏鹿) 県および瀋陽 (旧奉天) 市の康平県の一部地域、吉林省の吉林市、長春などの地域である。つまり、大半の測図エリアは瀋陽 (旧奉天) 市以北である。これらの地域は物資輸送の軸である東清鉄道が通っており、本図群は巨視的にはこの鉄道沿線周辺を描いていることになる。

本図群の中で、作製者がわかるのは6枚であり、それはすべて関係師団の参謀部および陸軍将校によって作製されている。作製時期が明記されているのは3枚だけで、奉天会戦が終わった1905 (明治38) 年3月10日以後のものである。その他の図についても、測図エリアから奉天会戦以後に作製されたと推測される。

以下では、本図群の昌図および威遠堡門附近の16枚 (表2のNo.1~No.16) について、『旧満洲五万分の一地図集成』所収の地形図 (陸地測量部・関東軍測

表 2. 大阪大学文学研究科人文地理学教室蔵 日露戦争関係地図 目録

No.	名 称	年 紀	作 製	縮 尺	サイ ズ (cm)	印刷状況
1	「前馬石堡附近之略圖」			2 万分 1	24.1×33.0	手書き
2	「威遠堡門附近之圖」			2 万分 1	48.6×33.8 ①24.3×33.8 ②24.3×33.7	手 書 き (筆)
3	吉林街道 (仮称)				46.4×35.4	謄写版
4	「二道河子附近之圖」			2 万分 1	32.4×46.7 ①24.0×32.2 ②32.3×15.0 ③8.4×32.2	手書き 一部鉛筆 書き
5	「見取圖」(南城子付近)	明治 38 年 6 月	第十師団参謀部製 歩兵少尉大倉熙	5 万分 1	33.5×47.1 ①33.5×24.3 ②33.5×24.2	カーボン
6	「見取図」(歡喜嶺付近)			2 万分 1	24.6×33.5	カーボン
7	(断片) 涼水泉子～神樹 堡				24.4×33.5	カーボン
8	「陶鹿附近略圖」			5 万分 1	24.2×62.1 ①24.2×32.5 ②24.0×33.0	謄写版
9	(断片) 陶鹿城付近				24.0×8.9	謄写版
10	「孤榆樹附近目算並記 臆測圖」	明治 38 年 6 月 23 日	第十師団参謀部 歩兵第三十九聯隊 第二中隊長歩兵中 尉村岡俊太郎	約 5 万分 1	24.4×33.0	謄写版
11	「威遠堡門」 (秘)		臨時測図部?	5 万分 1	47.0×33.3	カーボン
12	「昌圖」 (秘)		臨時測図部?	5 万分 1	47.3×33.3	カーボン
13	「昌圖停車場附近補足 圖」	明治 38 年 5 月	第四軍参謀部	20 万分 1	19.1×18.0	石版印刷
14	「沙河子附近之圖」		第六、第十師団参謀 部製版	約 4 千分 1	43.8×33.3 ①22.0×33.3 ②23.3×33.0	謄写版
15	「昌図及威遠堡門貼付 図」		第六師団参謀部製 版	5 万分 1	33.3×43.2	カーボン
16	(断片) 東清鉄道～石虎 子～孤榆樹				24.0×33.5	謄写版
17	「康平西北方補足圖」		総司令部	20 万分 1	33.7×24.2 ①33.7×24.2 ②12.2×5.1 (台形)	カーボン

18	「海龍及英額城」			20 万分 1	51.2×80.3 ①～③各 24.4×33.4 ④8.7×33.4 ⑤33.4×17.9 ⑥33.4×17.8 (L字型) ⑦9.0×15.2	青カーボン
19	吉林 (仮称)			20 万分 1?	39.5×42.0	カーボン
20	黄堡石炭坑付近 (仮称)				65.1×48.0 ①～④各 33.0×24.5	手書き
21	長春 (仮称)			20 万分 1	46.0×80.3 ①24.4×62.5 ②21.9×83.0 ③24.1×20.5	圖の写し
22	遼源附近 (仮称)				39.6×33.0 ①24.3×33.0 ②15.5×33.0	カーボン
23	昌図付近小縮尺図 (仮称)				39.7×78.2	カーボン

注 1) 「昌圖停車場附近補足圖」は騎兵第六聯隊の測圖を基として調製するものにして総司令部 20 万分 1 に貼付すべきものとしている。

「康平西北方補足圖」は第三軍參謀部において調製されるものにして総司令部 20 万分 1 昌圖に貼用する。

注 2) カーボンはカーボン紙による複写を示す。

注 3) 丸数字は、複数の紙が接合されていた図が分離している場合の、各葉のサイズを示す。

量隊作製 1932～1935 年製版) と比較しながら解説していく。

上記 16 枚の図の測図エリアは、図 1 の斜線部分に該当する。斜線部分は 5 万分 1 の地形図 6 図幅(查罕牛泉・昌圖縣・双廟子車站・威遠堡門・馬市堡・大慶陽)からなっており、その地図 6 枚を繋ぎあわせ、その上で各図の測図エリアを確定した。上記 16 枚の図は、一部測図エリアが重なるものもあれば、繋がるものもある。縮尺は、2 万分 1 および 5 万分 1 であり、大半は日露戦争時、最前線において陸軍将校が作製していたと考えられる。上記 16 枚の図の測図エリアに関し、5 万分の 1 地形図と比較すると、多くは精度が低いことが明らかである。経緯度や標高

点は、ほとんどで表示されていない。

以下では、上記 16 枚の図はどのような状況で作られたのか、あるいはどのような作戦で使用されたと考えられるか、当時の日本軍とロシア軍の戦闘記録を踏まえてその背景にアプローチする。

なお、奉天会戦(1905 [明治 38] 年 3 月 1 日～同 3 月 10 日)以後の日本軍は、鉄嶺を攻め落とし、長春に攻め入り、さらにハルピンを占領することをめざしていた。そのため、小支隊を主に奉天以北の地域に進出させ、ロシア軍との小規模な戦闘が絶えなかった。表 2 に示した図はその過程で作製されている。

16 枚の図のうち、No. 1～No. 11 については、昌図東方の吉林に向かう道路に沿った地域を描いてい

る。この地域の戦闘の焦点になったのは威遠堡門という集落で、以下、威遠堡門グループの図と呼ぶことにしたい。これに対してNo. 12~No. 16は、昌図

を中心とする地域の図であり、昌図グループの図と称することにする。両グループの図が描く地域の位置関係については、図2を参照していただきたい。

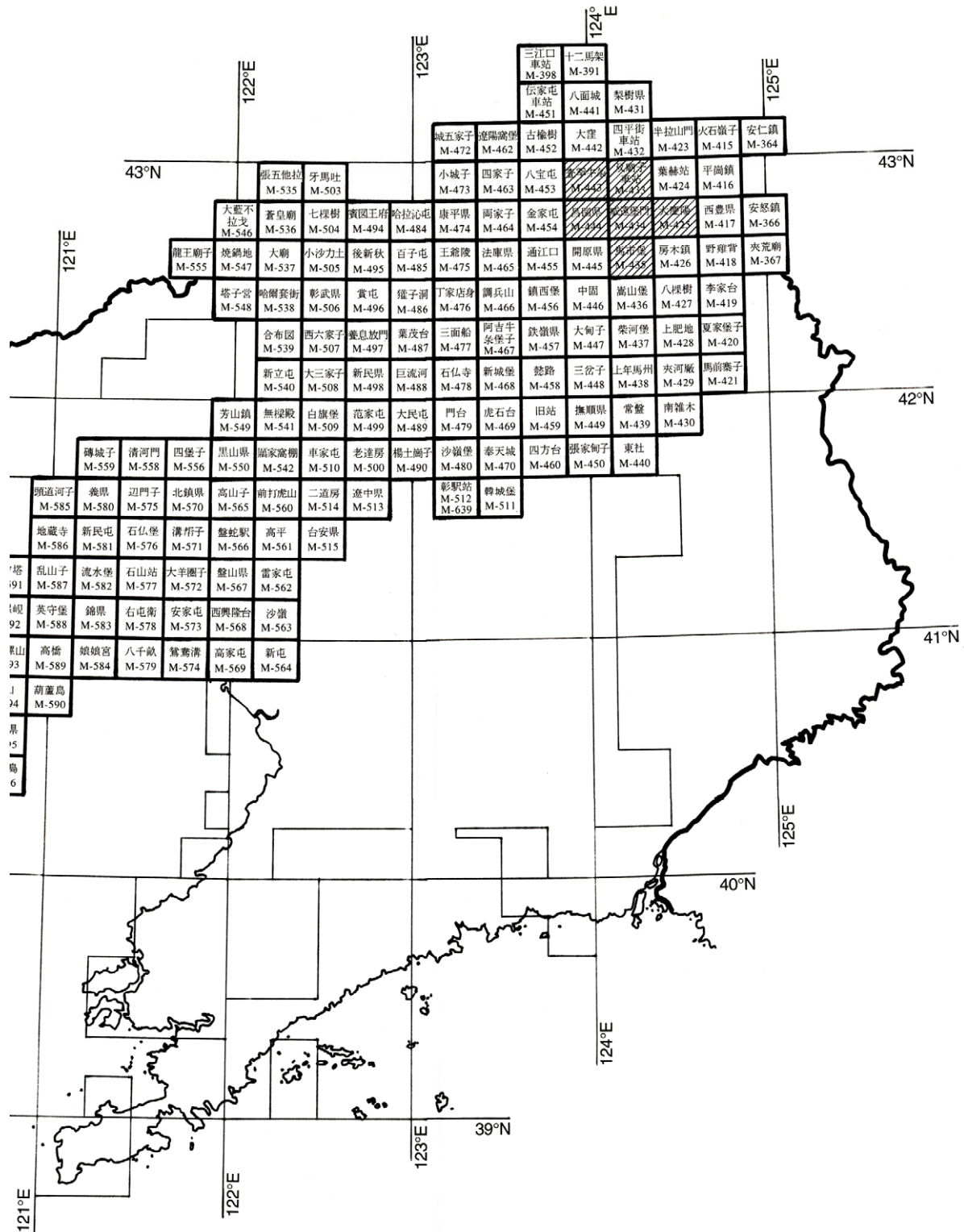


図1. 遼東省索引図

出典：中国大陸地図総合編纂委員会（2002）の索引図を一部改変して作成。

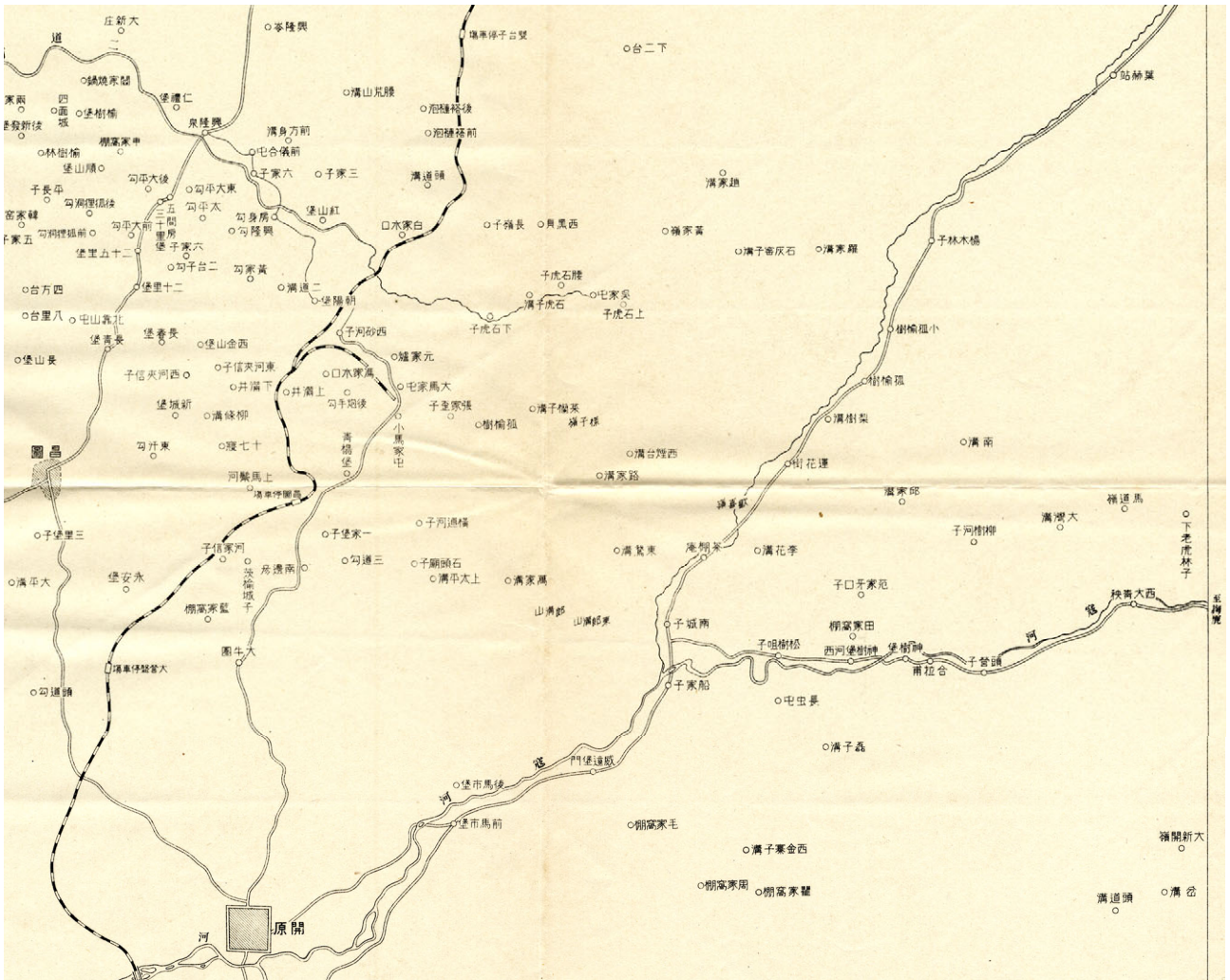


図 2. 昌図附近之一般圖

原図 (20 万分の 1) × 0.66.

出典：参謀本部 (1914b) の附図第十六 (部分)。

Ⅲ. 威遠堡門グループの図

吉林へ向かう道路に沿う地域を描く威遠堡門グループの図について、表 2 では、より南方の地区を描く図から北方を描く図へと順に配列している。以下この順で検討をくわえることとする。

なお、参謀本部編纂 (1914a,b) により、この地域における 1905 (明治 38) 年の 3~6 月の戦闘の経過を示したのが表 3 である。3 月下旬に威遠堡門を占領して以後、4 月になって日本軍は北に向かって孤榆樹附近まで進出するが、ロシア軍はこれに反撃して南進する。

ロシア軍の大きな攻勢は 2 回あり、第 1 回目は 4 月 11 日である。午前、ロシア軍の歩兵約一中隊、騎兵五、六十人は茶棚庵に進入し正午頃、砲四門で襲撃を開始した。さらに、南城子および船房 (家) 子附近を射撃するとともに、茶棚庵からロシア軍の歩兵 3 百人、騎兵約 2 百人が漸次南進してきた。そのため、南城子にいた歩兵第三十九聯隊第二中隊および騎兵第十聯隊第二中隊、騎兵第六聯隊第三中隊は斥候部隊を船房 (家) 子、馬家林子の附近に配置した。それ以外は二道河子に退却した。その際、ロシア軍は南城子およびその西方に停止していたが、南進せず日没の前に蓮花街に戻る。これによって、

表 3. 威遠堡門付近における日本軍の活動（1905 [明治 38] 年 3～6 月）

月 日	日本軍の活動	頁
3月 21日	第四軍第十師団騎兵、威遠堡門を占領	2
4月 3日	第十師団独立騎兵、歡喜嶺に進出、翌日蓮花街を占領	29
4日	同、孤榆樹を占領	34
5日	同、ロシア軍の攻撃のため威遠堡門へ退却、一部を南城子に残す	38
7日	同、威遠堡門の防御工事を行う	43
11日	ロシア軍、茶棚庵に進出、日本軍は一部を船家子付近に残し二道河子に退却、ただしロシア軍が蓮花街付近に退却したので、日本軍は南城子を再占領	49
22日	ロシア軍の攻勢により、日本軍は一部を威遠堡門付近に残して開原站へ退却、前進したロシア軍は後馬市堡を占領	57-61
23日	ロシア軍の攻勢つづき開原站にせまるが、夜になって威遠堡門南方に集合し孤榆樹付近に退却	64-69
24日	日本軍反撃、威遠堡門を占領、拘鹿・蓮花街方面を偵察	81
5月 3日	第十師団は威遠堡門附近を守備	101
20日	蓮花街方面のロシア軍南下、日本軍の前線の兵は二道河子、船家子に退却	152-153
21日	以後毎日ロシア軍の攻撃と撤退（蓮花街へ）	153
23日	日本軍南城子附近で敵情を搜索	157
6月 7日	ロシア軍は孤榆樹・蓮花街付近にあり、凉水泉子・南城子北方の高地を占領	165
19日	第十師団の一部は南城子を出発して蓮花街を占領	185
21日	南下するロシア軍と戦闘、ただし大きな変化なし	188-191

注：頁数は、参謀本部（1914a）の頁数を示す。

17時40分、歩兵第三十九聯隊第二中隊および一部の部隊は再び南城子を占領したのである（参謀本部 1914a: 49）。

第2回目は4月22日、茶棚庵にいたロシア軍は南城子の第十師団独立騎兵団の搜索隊（騎兵第六聯隊第二中隊、歩兵第三十九聯隊第二中隊）に向けて攻撃を開始した。10時40分、ロシア軍の斥候部隊は日本軍の搜索隊の退却を迫り、南城子に侵入し漸次兵力を増加した。14時頃、そのロシア軍の歩兵約二中隊が呉家屯西方高地、15時頃には五中隊が二道河子東北高地より本道の西方地区に散開し南城子附近より東方に前進した。ロシア軍の部隊が船房（家）

子附近に迫って来たため、第十師団独立騎兵の搜索隊はさらに威遠堡門に退却した。日本軍は威遠堡門、二道河子および前馬市堡附近に拠守したが、16時頃ロシア軍が威遠堡門を占領した。さらに、18時には四家子（前馬石 [市] 堡東部）附近も占領した。そのため、第十師団独立騎兵は開原に退却することとなった（参謀本部 1914a: 57-59）。

これに対し、すぐに反撃した日本軍は、再度威遠堡門を占領し、5月以後は一進一退の状態が続くことになる。

以下では、こうした経過をふまえながら、8枚の図を検討することとする。

① 「前馬石堡附近之略圖」(図3)

本図はここでとりあつかう 12 枚の図のなかで、最も南方の地域を描くものである。この北側に隣接地域については、②「威遠堡門附近之圖」(図5)が描いている。戦闘の経過のなかで、前馬石(市)堡は、一時期野戦倉庫が設置され、兵站上でも意義のある地点となった(参謀本部 1914a: 977)。

対応する地域の地形図である図4と比較すると、道路および河川の形や土圍の位置などは位置関係な

どがよく対応し、つぎにみる②「威遠堡門附近之圖」(図5)などとはちがって、「路上測図」のような精度のやや高い方法を用いて作成されたと考えられる。

この他、図4にみえる地名と比較すると、相違点がみとめられるが、中国語の発音は非常に似ている。廖家窪 [wa] 子と廖家凹 [wa] 子、羊 [yang] 馬大屯と養 [yang] 馬大屯、塔 [ta] 子溝と搭 [da] 子勾がその例である。

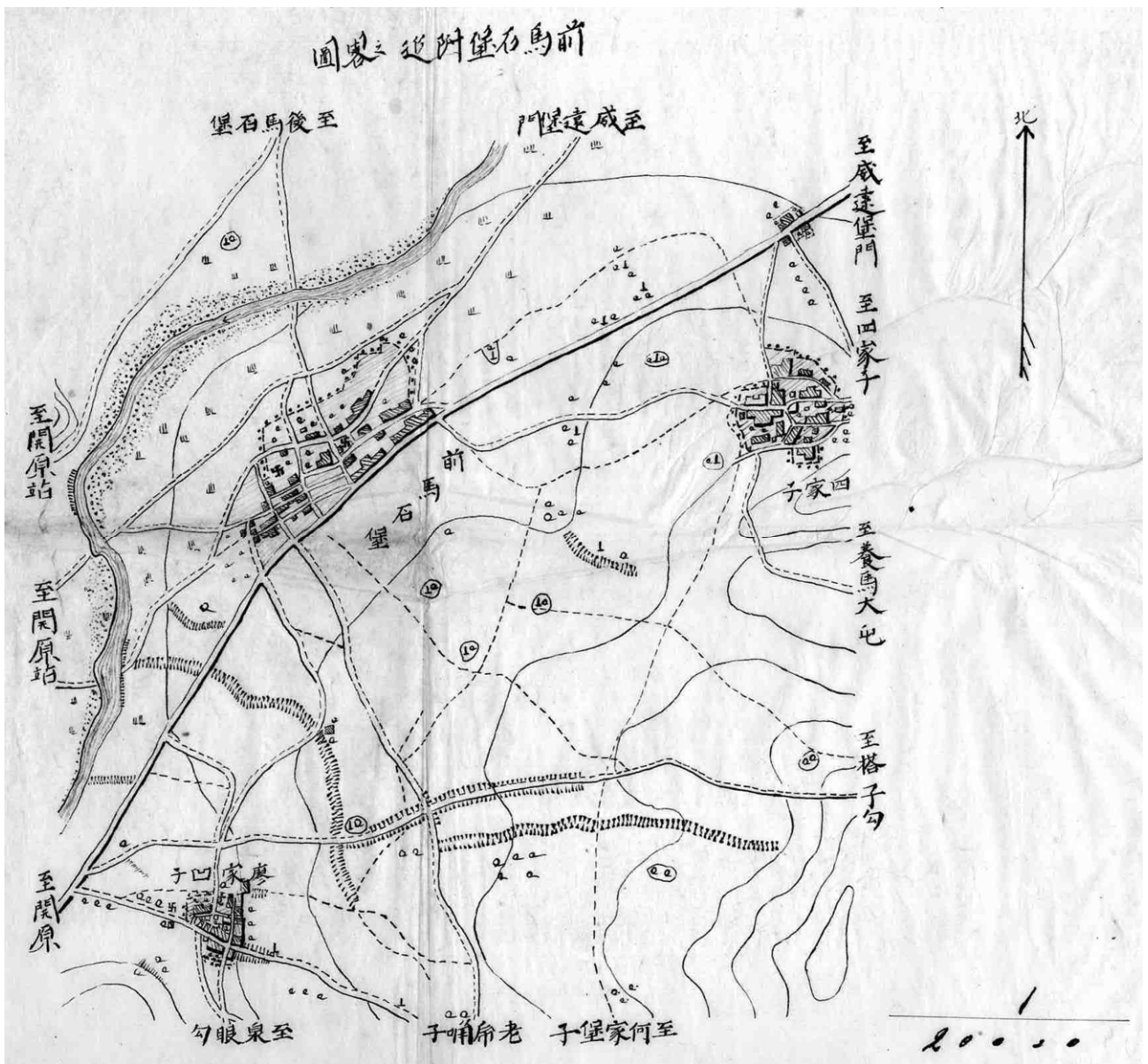


図3. ①「前馬石堡附近略図」(2万分1)

原図×0.79。



図4. 前馬市堡 (5万分1地形図「馬市堡」図幅)

原図×1.34。

出典：陸地測量部作製 (1985) (1932年製版)。

② 「威遠堡門附近之圖」(図5)

本図の南側には、上記①「前馬石堡附近之略図」(図3)が接続する。また威遠堡門の集落より北東方については、つぎに紹介する③吉林街道(仮称)(図7)④「二道河子附近之図」(図8)の測図エリアと重なる。

威遠堡門が最初に日本軍に占領された経過は、つぎのようなものである。第四軍第十師団前田支隊は、1905(明治38)3月20日、ロシア軍の兵力(歩兵一旅団、騎兵1千人)が昌図南方の左家勾、磚城子附近に宿営しているのを確認し(図2参照)、同師団独立騎兵の一部を昌図附近の露軍と接触させ、主力をもって伊通方向に前進し、吉林、長春方向のロシア軍の状況を捜索しようとした。そのため、3月21日、同騎兵は威遠堡門に到着し、午後2時に当地を占領

した(参謀本部1914a:2-3)。その後、上記のように威遠堡門は、日本軍とロシア軍が交互に占領することとなった。

本図の示す道路のパターンなどは、参謀本部(1914b:附図第三)による図6と比較するとよく対応するとはいえない。その点から本図は、目算測図のような方法で作製されたと考えられる。他方、まわりの丘陵については、屈曲に富んだ等高線が描かれているのも注目される。

本図の大きな特色は、中央の威遠堡門の集落附近には青鉛筆で掩体(┌──┐)や散兵壕、鹿柴(×××)など防御施設が記入されていることである(これらの記号については参謀本部[1914b:軍隊符号]を参照)。また類似の防御施設が、まわりの丘陵の高所などにもみられる点も留意される。こうした防御施設の設

置に、上記のような攻防の経過が関与していることは、その位置を示すためのものであったと考えられる。は明らかであり、本図のやや詳しい丘陵地の等高線



図5. ②「威遠堡門附近之圖」(2万分1)

原図×0.45。

③ 吉林街道（仮称）（図7）

威遠堡門の集落の北東方一帯を図示する。左上（北西）に威遠堡門より二道河子へと通じる道路（「吉林街道」と称している）を描き、その途中に下坎（觀）子の小集落をしめす。その南東にひろがる丘陵地には、青鉛筆で掩体や鹿柴を描き、「平山」、「因幡山」、「播磨山」、さらに「天王山」と日本風の地名を記している。このうち天王山は図6にも見えている。

図6と比較して本図の縮尺を算出すると、1万分の1程度となる。なお、この付近の4月22日の戦闘については、上記（18頁）および参謀本部（1914a: 57-59）を参照。天王山では、歩兵第三十九連隊第四中隊が守備にあっていたが、ロシア軍の圧迫が強くなれば、南方の毛家窩棚西方高地に移動することになっていた（図6参照）。

④ 「二道河子附近之圖」（図8）

本図の測図エリアは威遠堡門の北方に位置する二道河子周辺である。本図も道路の方位などは地形図（図9）とよくあうとは言いがたく、「目算測図」による可能性が高い。

本図でも、二道河子の集落のまわりや船房（家）子などに掩体、鹿柴などの記号が描かれているのは、上記のような4月22日のロシア軍との攻防が関与していると考えられる。

地名については、当て字あるいは省略化されているところがある。下觀 [guan] 子を下坎 [kan] 子と当て字しているほか、龍王咀子を龍咀子と省略化している。他に、差路満（図9参照）を「チャラゴウ」と、カタカナのみで表記している。



図7. ③吉林街道（仮称）

原図×0.38。

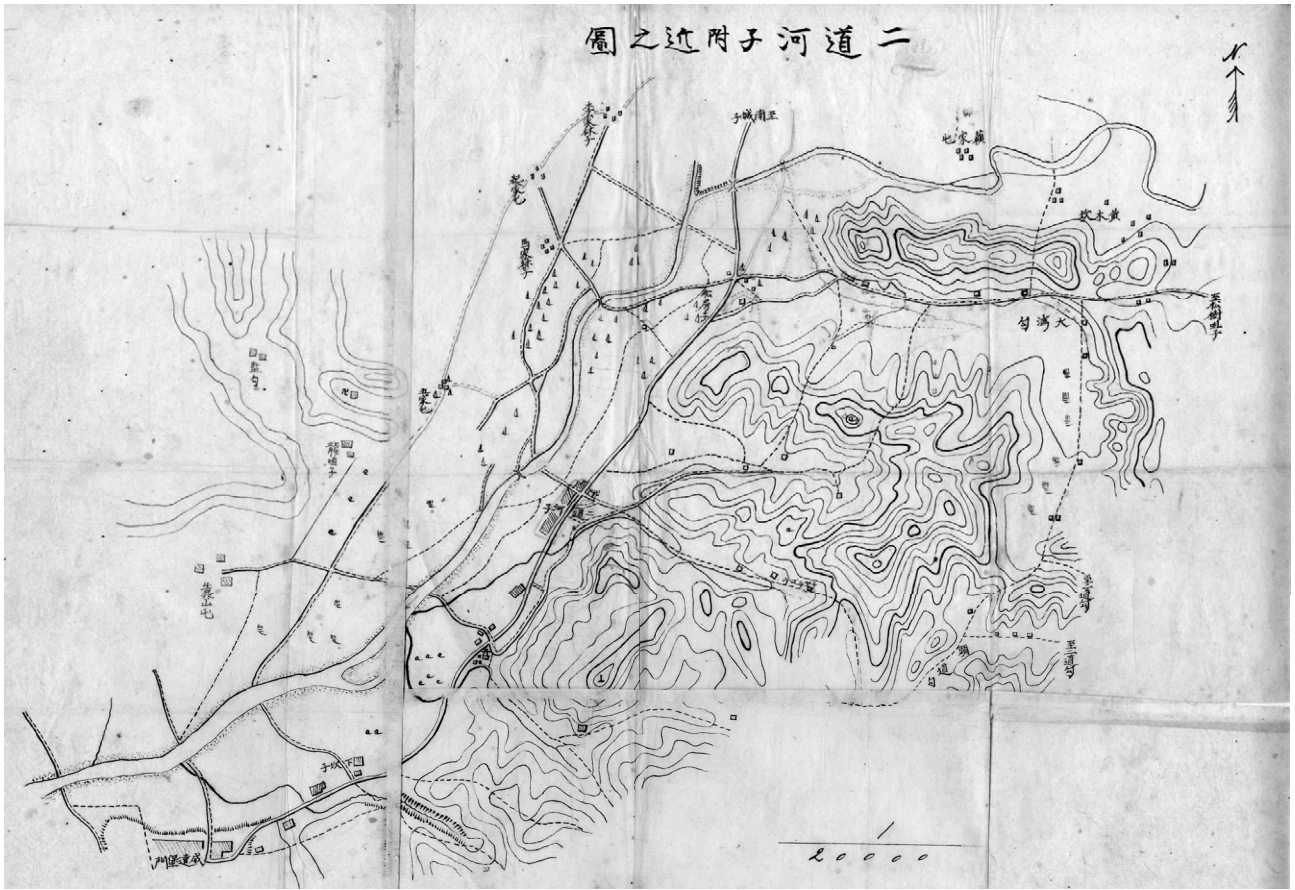


图 8. ④「二道河子附近之圖」(2 万分 1)
原图×0.39。

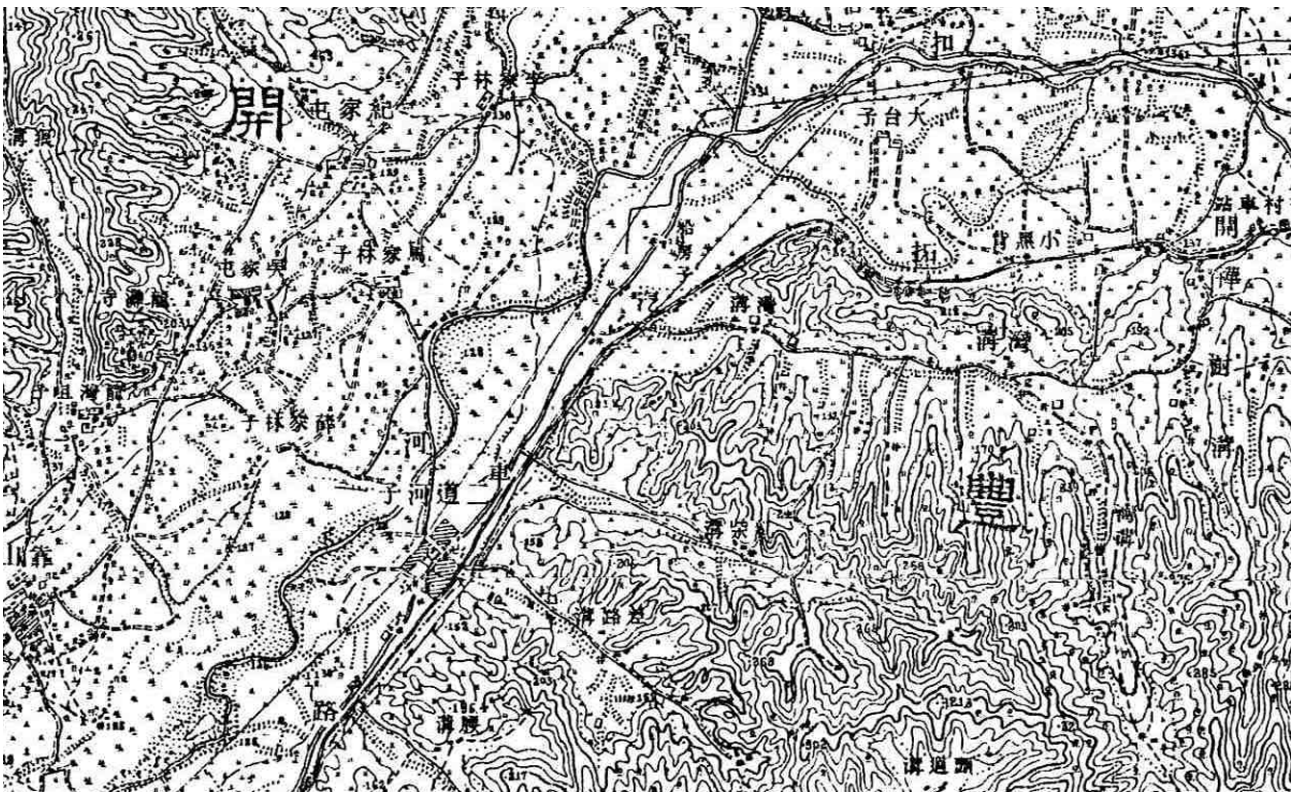


图 9. 二道河子 (5 万分 1 地形图「威遠堡門」图幅)
原图×1.06。

出典：陸地測量部 (1933 年製版)『旧満洲五万分の一地図集成』

⑤ 「見取圖」(南城子付近) (図 10)

本図は④「二道河子附近之図」(図 7) の北側の地域を描く図である。南西端にみえる船家(房)子は、④「二道河子附近之図」の中央北側にみえている。また北方では、つぎに述べる⑥「見取図」(歙喜嶺附近) (図 12) の図示範囲も含んでいるだけでなく、さらに遠方の蓮花街までも図示する。南城子は、北西方(後述する孤榆樹方面)、北北東方(歙喜嶺・蓮花街方面)、さらに東方(後述する陶[掬]鹿方面)に向かう谷底平野が出合うところに位置しており、要地であったと考えられる。

本図は、対応する地域の地形図(図 11)と比較すると、全体として一致度が高く「路上測図」の方法を用いたと推定される。

本図には縮尺(五万分一)のほか、作製時期(1905年6月)および測図者(歩兵大尉大倉熙)、さらに作製者(第十師団参謀部)を記している。「路上測図」や「目算測図」などでは、図を完成した際、題目、道程、縮尺、年月日および作製士官の氏名を記入するのが規則とされており(白幡 1892: 86)、これはそれに従ったものといえよう。

記入された時期から、表 3 にみえるこの地域の戦闘の過程の最後の段階で作成されたことがわかる。ロシア軍の南下(6月7日)、さらにそれに対する日本軍の反撃に関連していると考えられる。この時期の情勢について、『明治卅七八年日露戦史』の示す要点はつぎのようになる。



図 10. ⑤ 「見取圖」(南城子付近) (5 万分 1)

第十師団参謀部製。

原図×0.47。



図 11. 南城子 (5 万分 1 地形図「威遠堡門」・「大慶陽」図幅)

原図×0.66。

出典：陸地測量部作製 (1985) (1933 年製版)。

当時ロシア軍は、第一軍は伊通、葉赫、掏鹿間に、第二軍、第三軍は公主嶺、奉化間に兵力を集中していた。その他は海龍城およびその附近、鄭家屯、遼陽窩棚附近に集中していた。それまでロシア軍は兵

力の増加を図り、5月中旬には兵力が約7万人に達した。日本軍総司令官の大山巖はこのことを知り6月6日、今後、日本軍の満洲北方への前進を容易なものにするため、占領地区を北に拡張することを各

軍に命じていた。その命令を受け、第四軍は6月9日、全面的に前進を開始していた。第十師団の右翼隊石田少将が率いる先進支隊は、凉水泉子の北方—南城子—下城子の高地に宿営していたロシア軍を攻撃したのである。ロシア軍の一、二中隊の抵抗はあったが、蓮花街方向に退却した(図12を参照)。こうして石田支隊は6月9日午後2時頃、凉水泉子北方より南城子を経て下城子に亘る高地に位置するロシ

ア軍の陣地を略取することになった(参謀本部1914a: 166-168)。

もうひとつの関連するのは、6月21日のロシア軍の蓮花街からの南下に関連する戦闘で、日本軍は南城子—凉水泉子北方の丘陵地帯から反撃し、歙喜嶺東方の高地(図10には等高線が一部しか描かれていない。「見取図」(歙喜嶺附近)(図13)を参照)にまでいたったものである(参謀本部1914a: 188-191)。



図12. 南城子附近第十師団右翼隊之戦闘(1905年6月21日)

原図(5万分1)×0.77。

出典: 参謀本部(1912)の附図第十八。

なお本図にも、当て字あるいは省略化されている集落名があり、鎮北 [zhenbei] を正白 [zhengbai] 堡、涼水泉子を涼水泉、孫家堡子を孫家と表記している。当て字されている集落名は中国語の発音が非常に似ている。

⑥ 「見取図」(歙喜嶺附近) (図 13)

本図の図示範囲は、⑤「見取図」(南城子付近) (図 10) の図示範囲に含まれる。本図は同じ位置を示した図 12 と比較しても、非常に簡略である。主要道路上の集落の位置はほぼ一致し、地名も記載するが、それ以外は省略している。また地形図では田や広葉樹林を表示しているのに対して、本図ではそれらが省略されている。道路も一部しか表示していない。これらの点から、本図は「目算測図」によると考えられる。

本図が作製あるいは使用された背景として以下のようなことが挙げられる (図 12 参照)。歙喜嶺は、1905 (明治 38) 年 4 月 3 日、第四軍の先進部隊である第十師団独立騎兵によってはじめて偵察が行われた。

4 月 3 日、第十師団独立騎兵は、秋山支隊が昌図北方の鶯鷺樹に向って前進していることを知り、それに相応して蓮花街 (歙喜嶺の北部) 附近のロシア軍の状況を搜索するため、威遠堡門を出発した。同日 16 時頃、歙喜嶺に到着し、露軍の歩兵約 150 人が蓮花街附近の高地にいることを確認し、歙喜嶺および茶棚庵附近に宿営した。日没頃には、蓮花街のロシア軍が退却していたため、歩兵第三十九聯隊第二中隊を蓮花街に派遣した。同中隊はロシア軍の抵抗を受けながら、20 時蓮花街を占領した (参謀本部 1914a: 29, 57)。

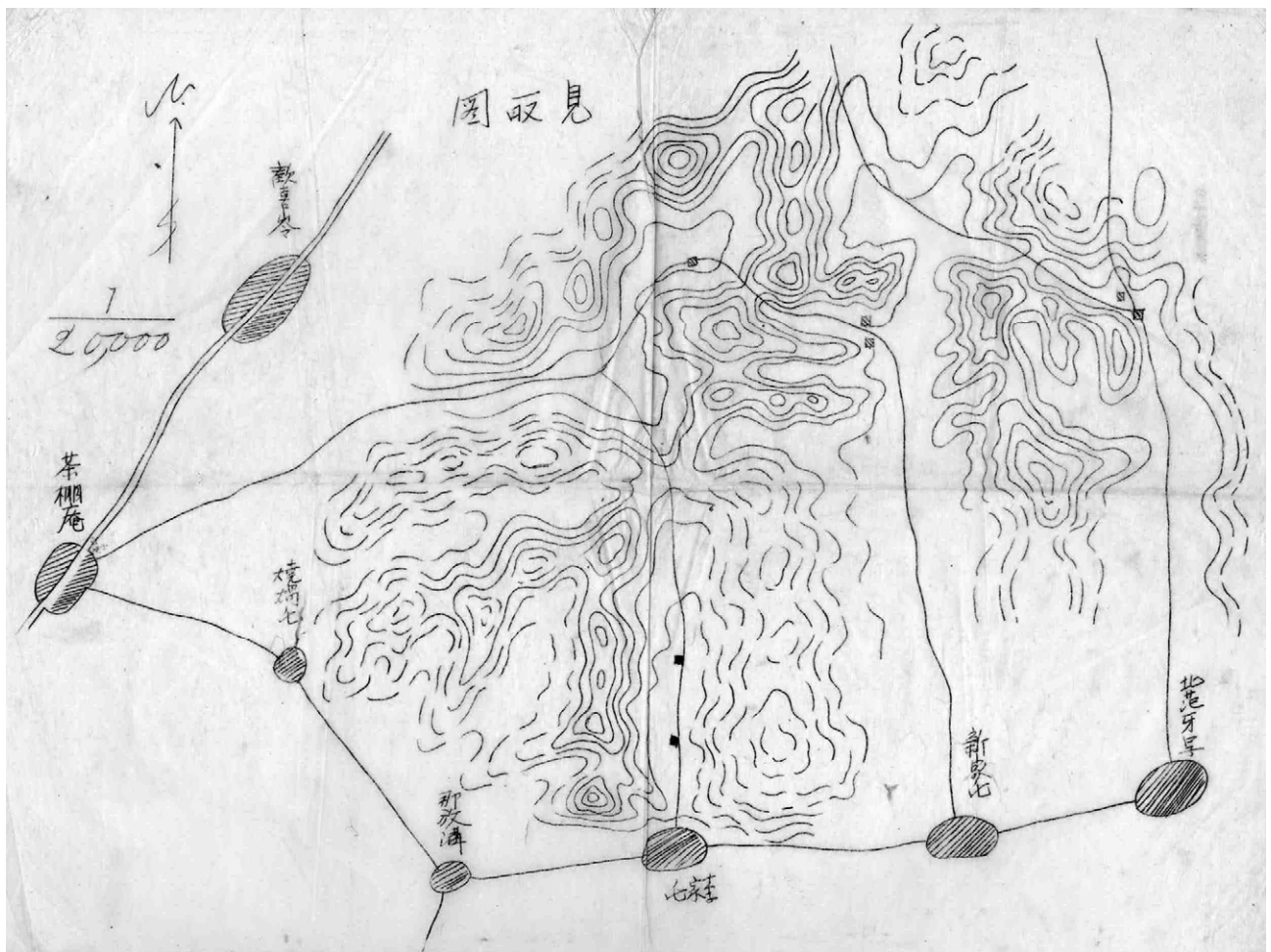


図 13. ⑥「見取図」(仮歙喜嶺) (2 万分 1)

原図×0.54。

その翌日、第十師団独立騎兵団は蓮花街から北進し、孤榆樹（⑩「孤榆樹附近目算並記憶測図」にあらわれる孤榆樹とは別）を占領した。しかし、4月6日、掏鹿にいたロシア軍が西進し大青秧まで来ていたため、4月7日、第十師団独立騎兵団のほとんどは孤榆樹から南進し威遠堡門に戻っていた。

もうひとつは、上記4月21日の戦闘で、本図の中央部の丘陵地帯は、同日夕刻には日本軍が略取することになった地域である。丘陵地帯が主題になっているところから、この際に作られた可能性が大きい、あるいは、上記の偵察時に作成した図をこの

戦闘で利用した場合も考えられる。

⑦（断片）凉水泉子～神樹堡（図14）

もともと2枚以上の図を貼り合わせていたものの南端部で、南城子東方の凉水泉子～神樹堡付近を示す（図12参照）。本図が分離する前の図の中心はその北側の、上記歡喜嶺東方の丘陵地帯にあったと考えられ、その点からすれば、もとの内容は⑥「見取図」（歡喜嶺附近）（図13）と類似するものであったと考えられる。縮尺は5万分1前後と推定される。

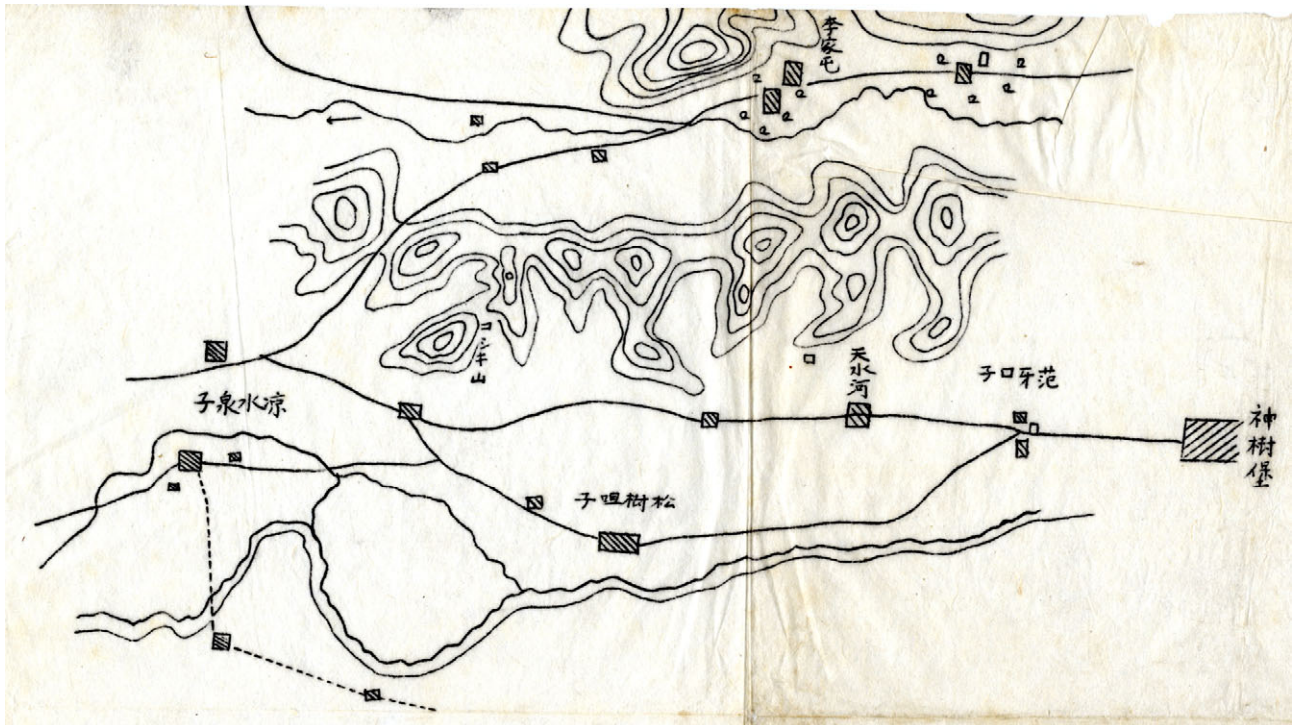


図14. ⑦（断片）凉水泉子～神樹堡

原図×0.75。

⑧ 「陶鹿附近略図」（図15）

本図の図示範囲は、⑤「見取圖」（南城子付近）（図10）および⑦（断片）凉水泉子～神樹堡（図14）の東側に当たる。対応する地域の地形図（図16）と比較すると、全体によく対応し、「路上測図」によるものと考えられる。掏鹿附近から西の、寇河に沿っている交通路とその近傍を表している。

本図が作製された背景として以下のようなことが挙げられる。掏鹿西方における搜索は二回ほど行わ

れていた。第一回目は、6月1日の第四軍石田支隊によるもので、第二回目は6月25日の第一軍第二師団によるものである。

第四軍の石田支隊は、6月1日威遠堡附近にあり、その騎兵第十聯隊は頭營子附近のロシア軍の状況を検索するため威遠堡門を出発した。同聯隊は、神樹堡の南部に位置する磊子溝に到着し搜索を行ったところ、ロシア軍は頭營子ではなく、西大青秧北方高地より神樹堡東北高地および范家牙口子北方高地に

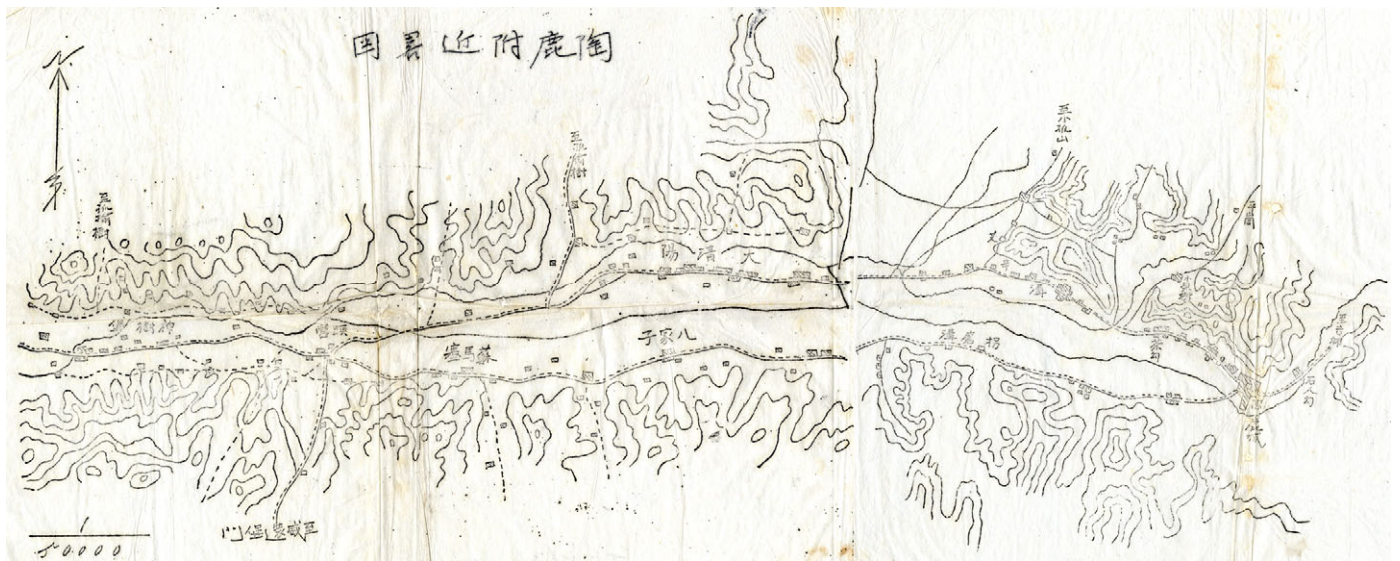


図 15. ⑧「陶鹿附近略図」(5 万分 1)

原図×0.37。



図 16. 掏鹿附近 (5 万分 1 地形図「大慶陽」図幅)

原図×0.47。

出典：陸地測量部作製 (1985) (1933 年製版)。

あるということを確認した (図 11 参照)。その他、ロシア軍の歩兵約一小隊は西大青秧北方高地で防御工事をしているという情報を把握し、威遠堡門に戻った (参謀本部 1914a: 160-162)。

第二師団による掏鹿西方の搜索は 6 月 25 日に行われる。当時、第一軍第二師団長は今後の前進を考慮し、北方におけるロシア軍の状況および地形を調べるため、二つの支隊に搜索命令を出した。その中で南城子および掏鹿の東方附近で搜索活動を行ったのが歩兵中佐川崎寅三の率いる部隊である。その任務は下老虎林子附近のロシア軍の状況を搜索しかつ馬道嶺、大湾溝附近の地形を偵察することである。川崎中佐の率いる部隊は頭営子のロシア軍の監視兵

を駆逐して午前 8 時 40 分、頭営子の北方高地を略取した。この時、柳樹河子西北高地よりロシア軍の歩兵約一小隊の射撃を受けるが、西大青秧北方高地、大湾溝附近、南溝の南方高地の線にロシア軍の大部隊および防御陣地がないことが確認できた。また、午後 2 時頃から激しい降雨と深い霧が原因で展望ができなくなり、偵察が不可能になったため午後 3 時に帰営をはじめた (参謀本部 1914a: 195-196)。

これらのことから、本図は 6 月 1 日の第四軍石田支隊による搜索あるいは 6 月 25 日の第一軍第二師団の掏鹿北部の偵察の際に作成・使用されたと推測できる。

また、本図では、掏 [tao] 鹿を陶 [tao] 鹿と当て

字されているところがみうけられる。

⑨ (断片) 陶 (掬) 鹿城付近 (図 17)

⑧「陶鹿附近略図」(図 15) の右端 (東端) 部分の断片で、左 (西) 側に別の図が貼り付けられていたと考えられる。本図の幅からみて、左側の図は寇河の北側地域を広く図示するものであったと考えられる。



図 17. ⑨ (断片) 陶 (掬) 鹿城付近
原寸大。

⑩ 「孤榆樹附近目算並記憶測図」(図 18)

ここにみえる孤榆樹は、蓮花街の北方にみえる同名の地域ではなく、南城子から北西方に延びる谷をさかのぼったところに立地する。この図は、その位置から昌図グループに入れるべきかも知れないが、暫定的に威遠堡門グループに入れておきたい。

本図には、作成時期 (1905 [明治 38] 年 6 月 23 日) や作製者 (第十師団第三十九聯隊第二中隊長歩兵中尉村岡俊太郎)、概数ではあるが縮尺 (約 50,000 分の 1) の記載があるだけでなく、「目算測図」ならびに「記憶測図」によることが明記されている点で貴重である。「目算測図」や「記憶測図」の精度を考える場合に、重要な参考資料となる。

本図の図示範囲は、丘陵とその間の谷が錯綜する地域で、その概要を把握するのは容易ではなかったと考えられる。しかし、対応する地域の地形図 (図 19) と比較すると、縮尺の問題をのぞけば、なんとかその位置関係が把握されていることがうかがえる。ただし、南方の横道河子の谷との関係を見ると、距離が過小に評価されている。また孤榆樹の谷の方向も図 19 では西北西—東南東であるのに対し、東西方向と認識されていたことがうかがえる。

この図の作成に直接関連すると思われる軍事行動の記事は、『明治卅七八日露戦史』には見あたらないが、6 月下旬の第四軍の偵察活動は間接的ながら、その作成につながったと考えられる。第十師団横地少佐の引率する部隊 (第三十九聯隊第三大隊およびその他) は、6 月 18 日夜に出発して、孤榆樹から北東方に 10km ほどはなれた地域を搜索した。その過程でロシア軍の斥候を駆逐し 6 月 19 日、9 時 40 分には石灰窑子溝西方に到着した。そして、羅家溝、黄家嶺一帯に露軍の展望哨があるのを確認し、13 時に帰還をはじめた (参謀本部 1914a: 185)。あるいはこの帰途に、本図が作成されたものと推定される。

⑪ 「威遠堡門 (秘)」(図 20)

本図は、これまでみてきた図に比較して、等高線に標高が記入されていること、図示範囲が広範であること、さらに西側に接続して別の図が作成されていることなど、際だった特色を示している。また、測図エリアが北方・東方で不整形な限界をもつこと

孤榆樹附近日算並記臆測圖

子虎不至

明治三十八年六月二十日

第十師團參謀部

步兵第九聯隊第百隊長安中村岡俊太郎

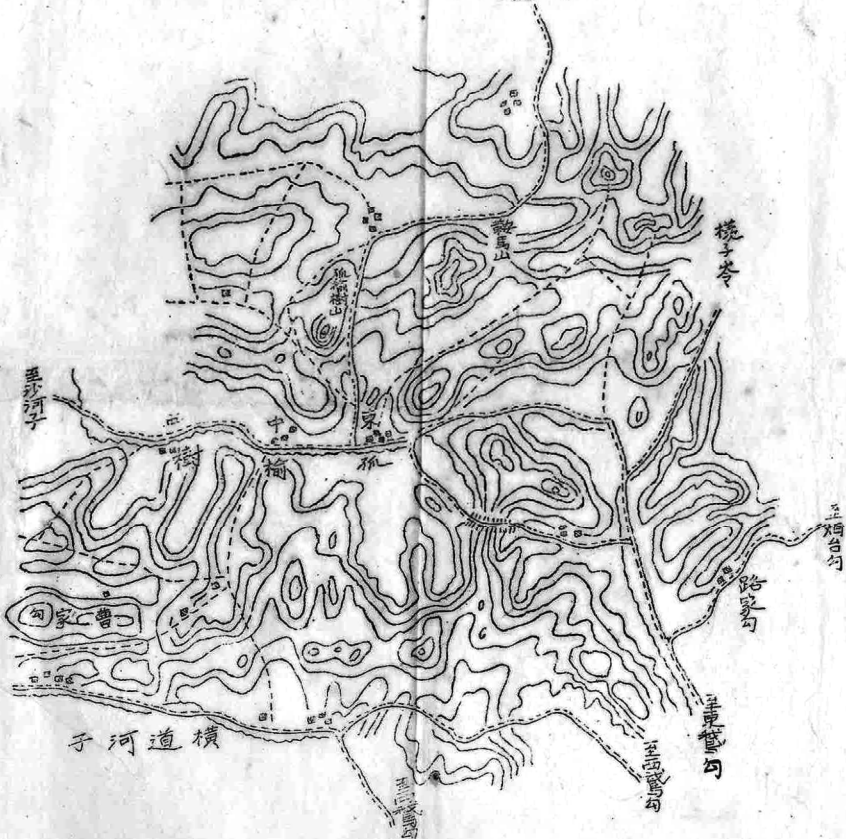


图 18. ⑩「孤榆樹附近日算並記臆測圖」(約5万分1)

原圖×0.60。



图 19. 孤榆樹 (5万分1地形圖「威遠堡門」圖幅)

原寸大。

出典：陸地測量部作製 (1985) (1933 年製版)。

威遠堡門



尺之一分五

图 20. ⑪「威遠堡門」(秘) (5 万分 1)

原图×0.53.

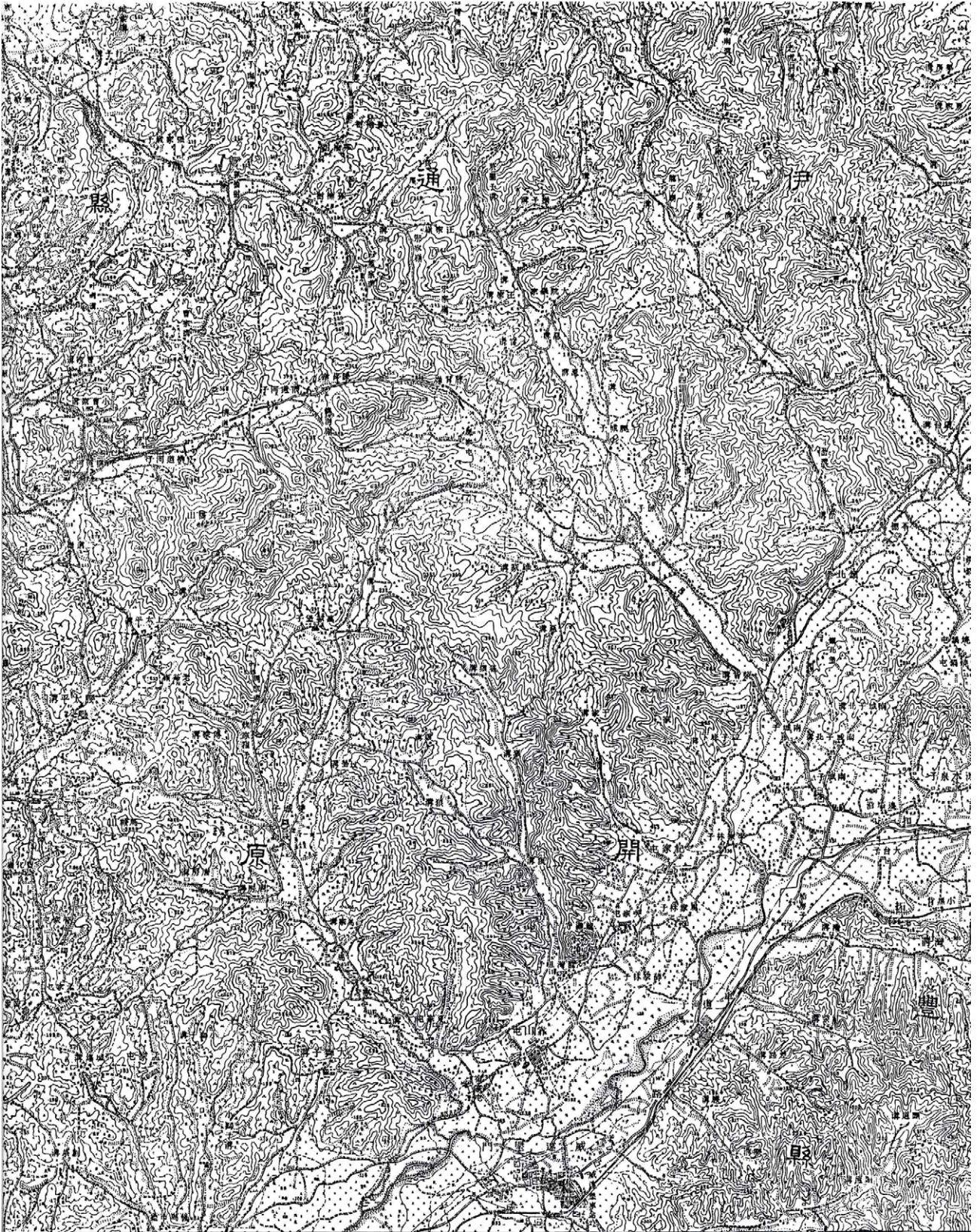


图 21. 威遠堡門 (5 万分 1 地形圖「威遠堡門」圖幅)

原圖×0.57。

出典：陸地測量部作製 (1985) (1933 年製版)。

も注目される。他方、これまでみてきた図と比較すると、⑧「陶鹿附近略図」(図 15) 付近が図示されていないだけで、やや遠隔地の孤榆樹までも北西側に含まれている。ただし威遠堡門、二道河子、南城子などの地名は記載されているが、前馬市堡や歡喜嶺の場合は示されていない。また、後の時期の地形図(図 21) と比較すると、両者は細部の違いはあれ、全体的に整合的であることも注目される。これらの点から、本図はこれまで見てきた「目算測図」や「記憶測図」によるものだけでなく、「路上測図」によると考えられるものとも大きくちがうものであることが明らかである。

これらの点を考慮すると、本図は戦闘部隊により作成された偵察図ではなく、むしろ測量技術者を中心とする臨時測図部による測量によるものであると推定される。本図の西側に隣接する地域の図としては、つぎにみる⑫「昌圖」(秘)(図 22) があり、両者が整合的に接合できることも、現場の戦闘部隊によるものではないことを示唆している。

日露戦争時の臨時測図部の活動範囲については、判明していることは多くないが、1936 年 7 月に臨時測図部関係者が行った座談会の記録である『外邦測量の沿革に関する座談會』(参謀本部・陸地測量部・北支那方面軍司令部 1939: 48、ただしアジア歴史資料センター資料) に、臨時測図部の第二班長として活動した藤坂松太郎による、昌図附近まで北上して測図したとする証言がみえることも、この推定を裏付けている。以上の点から、本図は⑨「昌圖」(秘)(図 22) とともに、臨時測図部により「迅速測図」によって作成されたと考えておきたい。その軸をなしたものは平板測量であろう。

なお上記藤坂が、昌図方面では、いったん前線附近まで行って、そこから後方に向かって測量したとしている点にも留意しておくべきであろう。この点からすれば、本図の測図エリアの北端は、1905 年 3～6 月のある時点における前線を反映することになる。

この他、本図において当て字がみうけられる。夏家溝 [xiajiagou] を下甲勾、狼溝 [langgou] を郎勾 [langgou]、龍灣咀 [wanjue] 子を龍王嘴 [wangzui] 子と表示しているところである。前二者は中国語の

発音が全く同じであり、三つ目は中国語の発音が非常に似ている。また、東郎溝 [gou] を東郎勾 [gou]、馬家溝を馬家勾などの当て字がみうけられており、中国語の読み方は全く一致している。

ところで、すでに示した図 6 と本図を比較すると、両者は非常に似ていることがあきらかである。このことから、図 6 のベースマップは本図と同系の図をもとに作製された可能性が高いと推測できる。

IV. 昌図グループの図

つぎに昌図グループの図の検討にうつりたい。このグループは、全 5 点と少なく、昌図附近の地形や交通路、集落を概観するようなものがめだつ。

⑫ 「昌圖」(秘)(図 22)

本図は⑪「威遠堡門」(秘)の西側の地域を測図エリアとし、同様に臨時測図部によって「迅速測図」の方法で作製されたと考えられる。すでに述べたように⑪「威遠堡門」(秘)と整合的に接続できる。ただし、両図の地名の筆跡あるいは中国語の読み方の有無など地名の表記の違いから、両図はそれぞれ異なる測図手が測図したと考えられる。

本図の測図エリアは昌図を中心とする東清鉄道の沿線で、中央を南北にその路線が描かれている。本図と対応する地域の地形図である図 23 を比較すると、道路や鉄道の記号などは少々異なるが、全体的に近似している。両図の相違点は集落名の表記の方法と地図記号である。本図はほとんどの地名(漢字)に中国語の読み方をカタカナで表している。例えば、下溝井(シャーマンジン)、八家子(パージャーズ)、営子(インズ)、河家信子(ホージャシンズ)などがある。しかし、昌図府(シャオシーフー)だけは日本語読みに近い発音で表記している。中国語の読み方は「チャン・ツー・フー」である。

これらの点から、当時の測量担当者の語学能力が注目される。臨時測図部の募集要件として測図手を募集するにあたって、条件は「一、身体強健 二、意志鞏固 三、機知豊富 四、勤務勉勵 五、足脚健剛 六、清語約通 七、戦術少通 八、飲酒少量」(参謀本部・北支那方面軍司令部 1979: 60; 小林解説



图 22. ⑫「昌圖」(秘) (5 万分 1)

原图×0.53。

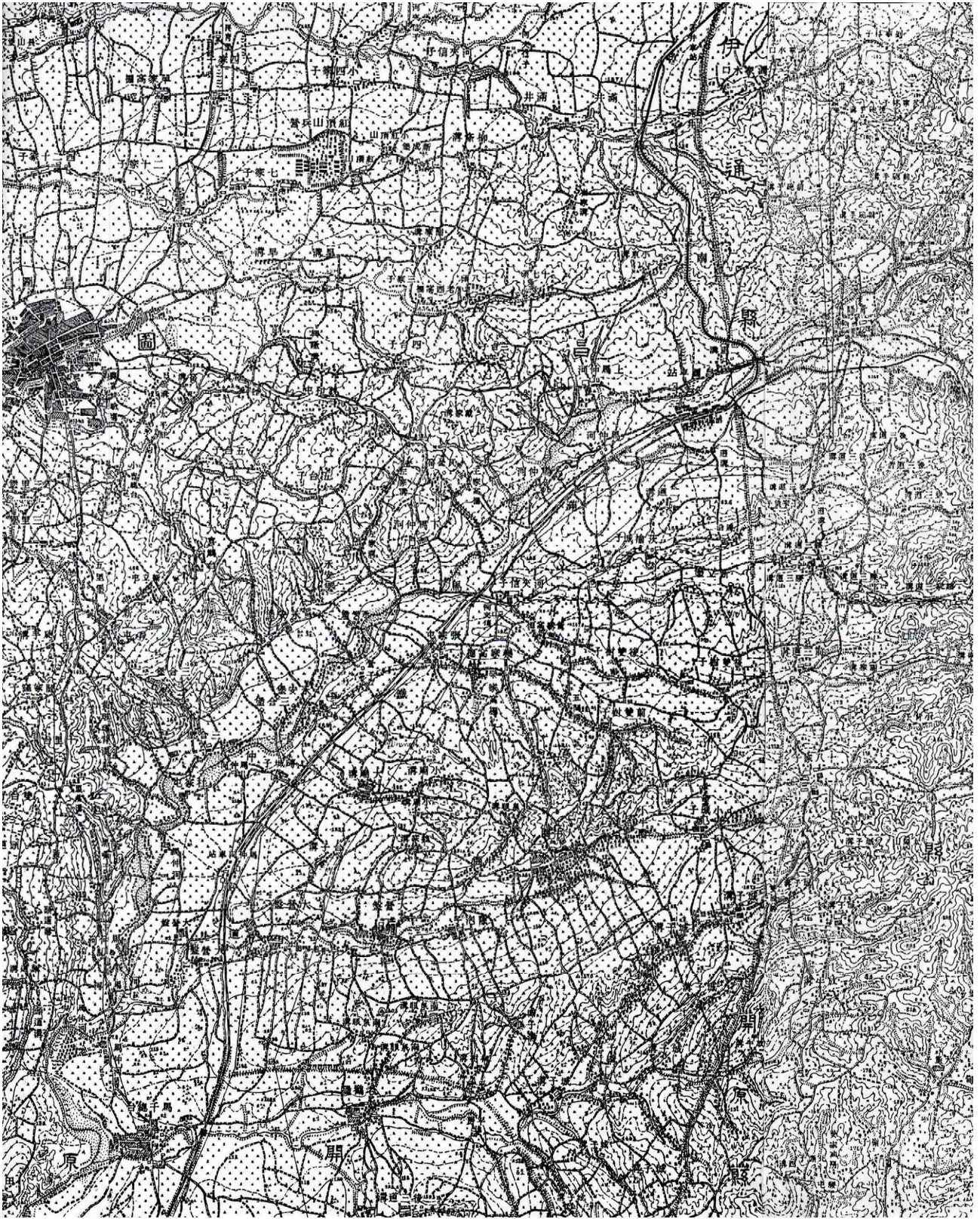


图 23. 昌圖 (5 万分 1 地形图「昌圖縣」、「威遠堡門」图幅)

原图×0.57。

出典：陸地測量部作製 (1985) (1933 年製版)。

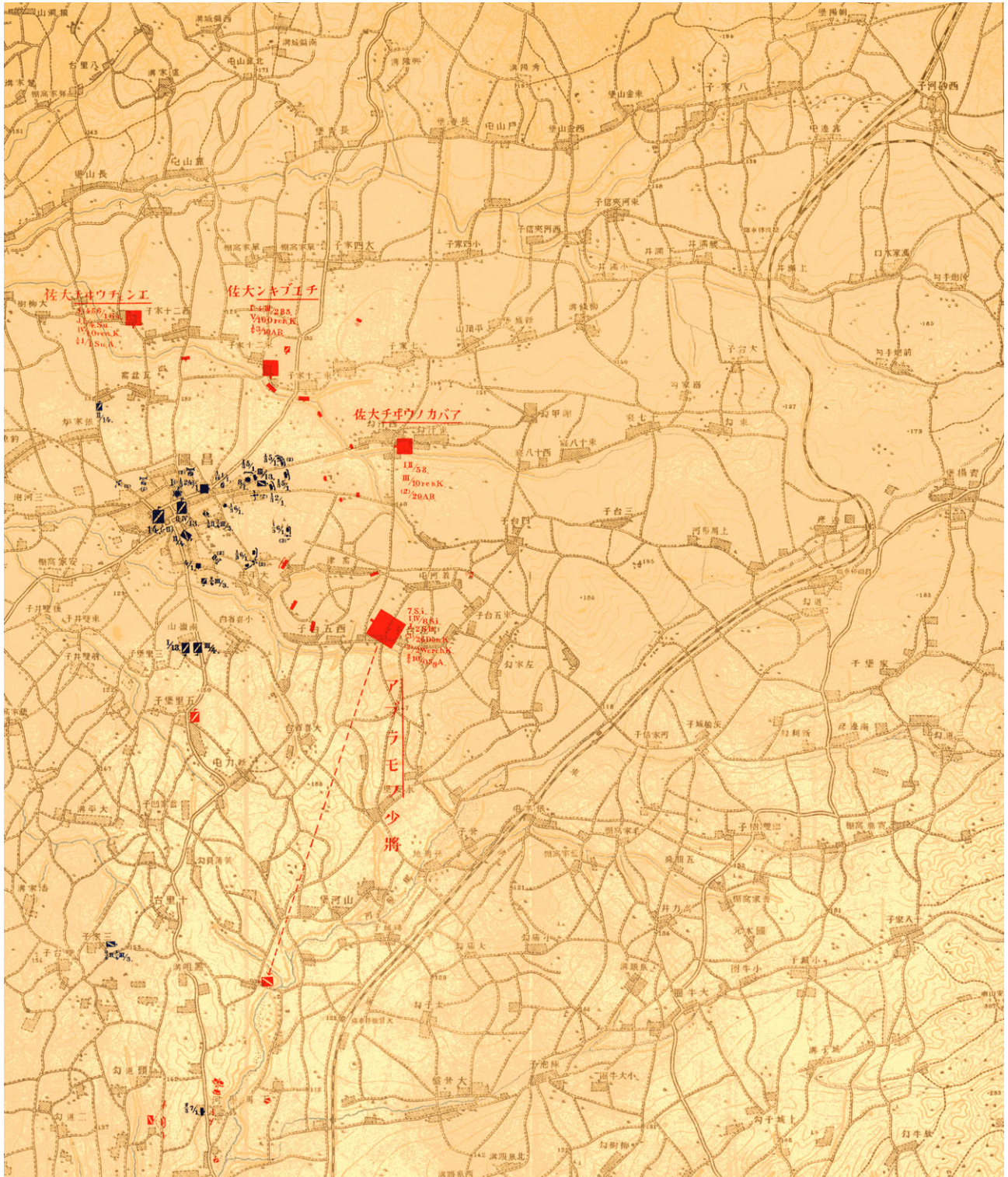


図 24. 昌圖附近秋山生田目両支隊之戦闘 (1905 年 4 月 23 日正午頃)

原図 (5 万分 1) $\times 0.56$.

出典 : 参謀本部 (1914b) の附図第四。

2008: 18) であり、臨時測図部の測図手は中国語が少し話せていたのがわかる。また、臨時測図部第二期には通訳の人員もいたので、現地の中国人に集落名について訪ねながら、地図を完成していたと推測できる。

⑪「威遠堡門」(秘) および⑫「昌図」(秘) は、比較的精密な地図であり、それぞれ図 21 および図 23 と近似度が高い。これらの地図を基に再測量をくわえ、図 21 および図 23 が作製された可能性も考えられる。

つぎに昌図付近での戦闘について、記しておきたい。日本軍が昌図を占領したのは、1905 (明治 38) 年 3 月 22 日である (参謀本部 1914a: 3-4)。そのご 4 月になってさらに北方に進出するが、南下するロシア軍と衝突し、主力を昌図に後退させることとなった (参謀本部 1914a: 30-31, 38-47)

4 月 22 日朝から、ロシア軍は昌図を包囲することを目的に、昌図の北方から漸次南進しており、午前中、昌図停車場東北高地、上下満井、靠邊屯および八家子、東汗勾の附近に達した (参謀本部 1914a: 62-64)。

秋山少将はロシア軍の南進を知り、歩兵第一聯隊 (第三大隊欠) と共に昌図を固守することを決意し、機関砲、騎砲兵各一小隊を陣地に配置した。また生田目中佐は諸隊を集め昌図東端陣地におき、歩兵第五第六中隊の各一小隊を昌図東端に配置した。そして、機関砲二門は同村東端陣地におき、歩兵第五第六中隊の各一小隊は散兵壕におき、対戦準備を行った。

午後、西汗勾および七家子附近のロシア軍の騎兵が日本軍を射撃したが、夕方には兵力を増加し、さらに十七寝の東北に前進し、2、3 百の歩騎兵のロシア軍が昌図停車場附近に侵入した。そのため、日本軍は張家屯、五台子、東二十家子、瓦盆窑、馬千総台附近を固守した。そして、秋山支隊と生田目支隊は依然昌図附近を固守した。

翌日、朝 6 時頃ロシア軍の騎兵約二中隊は西砂河子方向より西金山堡を通過し西進し、さらに東二十家子より昌図東北端に向かい攻撃し、5、6 百人のロシア軍は七百子に至る。そして、西砂河子のロシア軍は続々と南進し昌図停車場附近に至っては昌図に

向かって前進した。ロシア軍の一部は東汗勾、西汗勾、東二十家子、西二十家子の附近に砲二門をおき、昌図および東北丘阜および東北端角面堡に向かって射撃しはじめた。秋山支隊は騎砲兵を昌図の北端と西北端に配置し射撃を行った。機関砲二門は昌図の東端および東北端の陣地におき、一部兵力は昌図東南端におき生田目支隊とともに、ロシア軍と交戦した。

4 月 24 日、両軍は再び交戦するが、4 月 25 日ロシア軍は昌図以北の蓮花街、西砂河子、興隆泉、四方台および二小屯の線に退却する (参謀本部 1914a: 70-79)。

この戦闘の一部は、本図の測図エリア内で行われている。この点を考慮すると、本図のための測図がこのロシア軍の攻勢の前に行われたものか、後に行われたものか関心が引かれるが、両者の可能性があるとしておきたい。なお、5 月 18 日以降にも、ロシア軍の小攻勢があったが、大きな変化はなかった (参謀本部 1914a: 150-152)。

上記ロシア軍の攻勢に関連して、日露両軍の配置を描いたのが図 24 である。⑫「昌圖 (秘)」と非常に似ており、同図は同系の図をもとに作製されたと考えられる。

⑬ 「昌圖停車場附近補足圖」(20 万分 1) (図 25)

本図の縮尺は 20 万分 1 で、他の図と比べて小さい。右肩に「本圖ハ騎兵第六聯隊ノ測圖ヲ基トシテ調整セル者ニシテ総司令部二十万分一二貼付スヘキ者トス」と述べている。総司令部が作製した 20 万分の 1 が各部隊に配布されており、それを補足する図として第四軍参謀部が作製して配布されたものと想定される。検討をくわえていないが、本図群には、小縮尺の 20 万分の 1 図が他にも含まれており (表 2)、これらと組み合わせて使用されたものであろう。

1905 (明治 38) 年 4 月下旬、日本軍の戦闘力はほぼ回復し、満洲軍総司令官は 5 月の準備として、各軍に作戦計画に関する命令を下していた。第四軍の任務は、新家屯、および開原の前線以北に進み、先進支隊をもって威遠堡門附近を占領することであった (参謀本部 1914a: 89)。そこで、第六師団は 5 月 4 日、騎兵第六連隊に歩兵第十三連隊を附して小城子

昌圖停車場附近補足圖

(一分万十二)

本圖ハ騎兵第六聯隊ノ測圖ヲ基トシテ請製セル者ニシテ
 總司令部二十万分一二貼付スヘキ者トス

明治三十八年五月



第四軍參謀部

図 25. ⑬「昌圖停車場附近補足圖」(20 万分 1)

原寸大。

明治三十八年五月 第四軍參謀部

(昌圖停車場以西) 附近におき、北方の四平街方面のロシア軍の状況を搜索した。その後、第六師団の独立騎兵は長江支隊と改称し、5月15日南邊彦附近に移り、また騎兵第六連隊の一中隊を昌圖停車場北方

高地に派遣して北方にいる露軍を警戒した。5月19日には、昌圖停車場附近において、長江支隊は南進したロシア軍と苦戦し、一時的に占領されていた昌圖停車場を奪回することになった(參謀本部 1914a:

108, 150-156)。

本図はこのような経過の中で作製されたものと考えられ、東清鉄道沿線の状況を示している。

集落名については、⑮「昌図及威遠堡門貼付図」(図 18)と同様に河夾信子を河家信子、前砲手勾を前抱手勾と当て字が使用されている。また、營子をエンザと中国東北なまりの発音で表記している。これは、測図の際現地の住民に集落名について尋ねながら地図を完成させていたと考えられる。

⑭ 「沙河子附近之図」(図 26)

本図の測図エリアは、⑫「昌図(秘)」(図 22)の北部にあたる地域であり、東清鉄道のルートを中心に描いている。左上に「第六師團司令部製」としつつも右下に「第十師團参謀部」としており、もともとの図が第六師團によって作成されたことをうかがわせる。第六師團と第十師團は、ともに第四軍を構成しており、地図情報のやりとりが行われていたことを示している。

本図の測図エリアに対応する地域の地形図(図 27)と比較すると、交通路や鉄道のルートなどにかなりのズレがみられる。集落の位置関係も同様で、沙河子停車場の西部において、図 27 では新立屯は紅山堡と朝陽堡を結ぶ線の西方にあるが、本図ではそれが東方に位置する。また、北、中、下石虎子の位置は、図 27 では沙河子停車場(泉頭車站)の東南部に位置するのに対して、本図ではそれが東北部に描かれている。こうした点から本図は「目算測図」によるものと考えられる。

これに関連して注目されるのは、東清鉄道のルートが、図の北部部分では十分に把握されていないことである。これは、重要な交通路に関する地理情報を日本軍があらかじめ把握していなかった可能性を示唆している。

本図の縮尺は約 4 千分 1 と大きいのが、5 万分 1 縮尺の図 27 と比べて、集落間の距離は大差ない。その点から、縮尺約 4 千分 1 は 4 万分 1 との間違いではないかと思われる。

この他、本図と図 27 との相違点として、青揚[*yang*]堡を青陽[*yang*]堡と当て字が使われていることもあげられる。

⑮ 「昌図及威遠堡門貼付図」(図 28)

本図の測図エリアは、⑭「沙河子附近之図」(図 26)とほぼ同じである。縮尺にくわえ、道路の方向や東清鉄道のルートについては改善がみられるが、紅山堡一朝陽堡と新立屯の位置関係が図 27 と同様である。これらの点から、なお本図は「目算測図」によって作製されたと考えられる。

「貼付図」とされているところから、本図は同縮尺の図に貼り付けることを前提に作製されたものと思われる。⑬「昌図停車場附近補足図」(図 25)の場合と同様に、既存の図が、地図情報の増加とともに改訂されていったことを示すといえよう。

その他、本図は一部集落名において、沙河子をシヤカシ、満井をマンゼイと、日本語読みのカタカナで表示している。同じく第六師團参謀部製とはいえ、⑭「沙河子附近之図」(図 25)では集落名を漢字のみで表記していることから、測図者は異なると思われる。

また図 27 と比較して、以下のような当て字が確認されている。河夾[*jia*]信子を河家[*jia*]信子、前砲[*pao*]手勾を前抱[*bao*]手勾、窑[*yao*]勾を腰[*yao*]勾、達[*da*]連泡を大[*da*]連泡などである。

⑯ (断片) 東清鉄道～石虎子～孤榆樹(図 29)

もともと本図の上下には、それぞれ接続する図が貼り付けてあったものが脱落したと考えられる。左(西)に東清鉄道、右(東)に吉林にいたる道路を示す。東清鉄道沿いの地名(双磨[*廟*]子)や吉林にいたる道路沿いの地名(孤榆樹)から判断すると(図 2 参照)、小縮尺の図である。等高線を示して詳しく示す部分と、集落名およびそれを結ぶ交通路を示すだけの部分があり、前者は「路上測図」によるものと考えられる。

本図群の中では最も北方を図示し、その情報源が注目される。

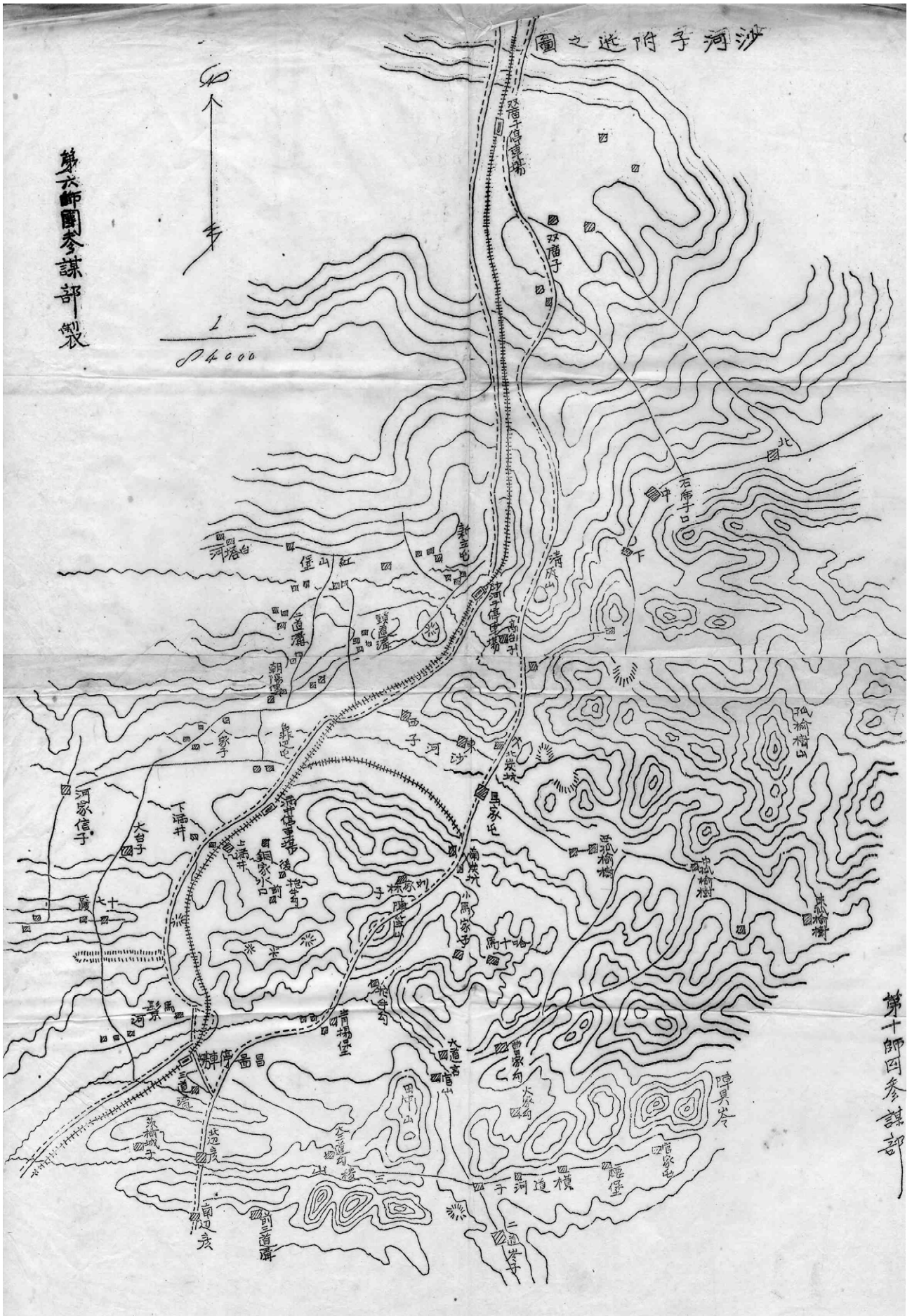


图 26. ⑭「沙河子附近之圖」

原圖×0.56。



图 27. 沙河子附近 (5 万分 1 地形图「查罕牛泉」、「昌圖縣」、「双廟子車站」、「威遠堡門」图幅)

原图×0.57。

出典：陸地測量部作製 (1985) (1933 年製版)。

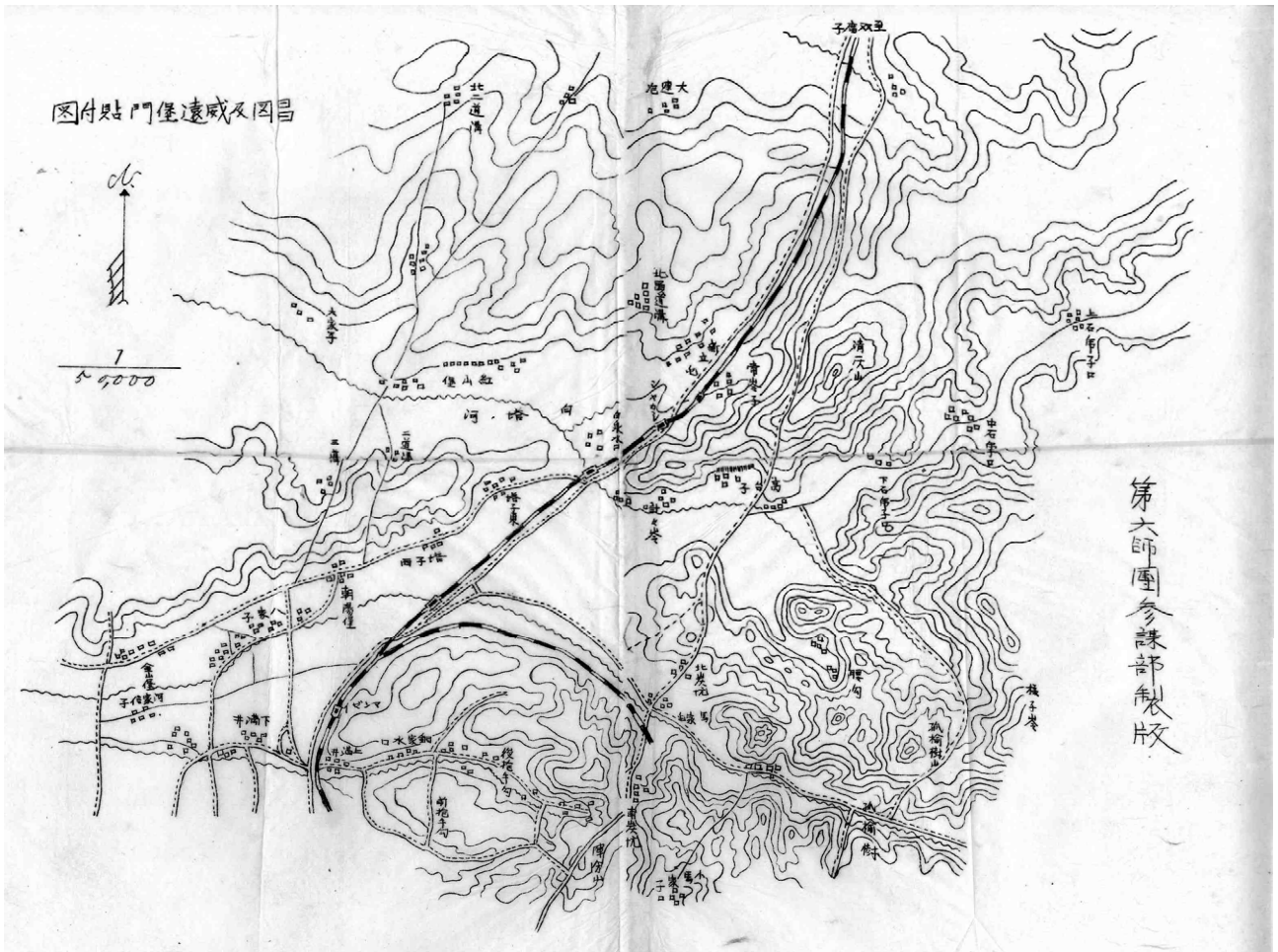


図 28. ⑮「昌図及威遠堡門貼付圖」(5 万分 1)

原図×0.42。

第六師團參謀部製版。

以上、本図群の 16 枚の図を検討した。その結果、本図群は偵察時に作成された「目算測図」や「記憶測図」によるもののほか、「路上測図」さらには「迅速測図」によって作成されたと考えられるものもみられることが明らかになった。このうち「迅速測図」による考えられるもの (⑪「威遠堡門 (秘)」[図 20] および⑫「昌図 (秘)」[図 22]) は、臨時測図部の測量技術者の作成と推定される。これに対して、その他の図は、現場の部隊の下級将校や下士官の作成となる。

また、後に作成された地形図と比較対照すると、臨時測図部の測量技術者によると推定されるものは、簡略ながらほぼ同等の精度をもつが、その他では、精度が低いことが明らかである。これをまとめるとつぎのようになる。

1. 地形は簡単に描かれており、標高や標高差は記入されていない。
 2. 広葉樹林や荒地および田などの土地利用が省略されている
 3. 集落名が当て字されている
 4. 道路の種類が異なる
 5. 縮尺は同じなのに、集落間の距離が異なる
- このうち、道路の種類が異なるのは、本図群が作成されてからの交通路の変化によるものが大きいとみてよいが、他の相違点は正確さよりも迅速さを重視する偵察図の特徴を示している。地名の漢字表記に関して、正確な書き方よりもむしろ発音や読み方が重視されていたと思われる点もそうした偵察図の特色と理解できよう

なお、本図群のもともとの所持者が単一の人物で



図 29. ⑩ (断片) 東清鉄道～石虎子～孤榆樹

原図×0.53。

あったとすれば、それは第十師団に属して威遠堡門付近の戦闘に従事した将校であった可能性が高い。また、地図の多くが複写物や印刷物であるところから、所持者が作製したものというより、その所属部隊で複写あるいは印刷されたもの、さらには他の部隊で印刷されたものが配布された場合がほとんどであったと考えられる。近代地図が整備されておらず、地図情報を自ら入手しつつ戦闘を行う場合には、このような方法によって地理情報の共有をはかっていく以外になかったと考えられる。

文献

小林 茂 2009. 『外邦測量沿革史 草稿』解説. 『「外邦測量沿革史草稿」解説・総目次』5-27. 不二出版.

小林 茂解説 2008. 『外邦測量沿革史 草稿、第1冊』不二出版.

小林 茂・山近久美子・渡辺理絵 2008. 初期外邦図の作製過程と特色. 2008 年人文地理学会大会研究発表要旨 42-43.

小林 茂・渡辺理絵 2008. 近代東アジアにおける地図作製技術の移転—日本を中心に. 千田 稔編『アジアの時代の地理学—伝統と変革』145-158. 古今書院.

参謀本部編纂 1914a. 『明治卅七八日露戦史』第十卷 東京偕行社.

参謀本部編纂 1914b. 『明治卅七八日露戦史』第十卷附图 東京偕行社.

参謀本部・北支那方面軍司令部編 1979. 『外邦測量沿革史草稿初編 自明治二十八年至同三十九年断片記事』ユニコンエンタプライズ.

- 参謀本部・陸地測量部・北支那方面軍司令部 1939.『外邦測量の沿革に関する座談會』JACA (アジア歴史資料センター) Ref. C04121449200; C04121449300 (防衛庁防衛研究所) .
- 白幡郁之介編 1892.『簡易測圖法』千城社.
- 多門二郎 2004.『日露戦争日記』芙蓉書房.
- 中国大陸地図総合編纂委員会作図・編集 2002.『中国大陸五万分の一地図集成総合索引 (改訂・増補版)』科学書院.
- 野坂喜代松・和田義三郎・平木安之助・高木菊三郎・松井正雄 1944. 明治三十七八年戦役と測量 (座談会) . 研究蒐録地圖 (昭和 19 年 3 月 1 号) 41-54.
- 茂沢祐作 2005.『ある歩兵の日露戦争従軍記』草思社.
- 山近久美子・渡辺理絵 2008. アメリカ議会図書館所蔵の日本軍将校による 1880 年代の外邦測量原図. 日本国際地図学会平成 20 年度定期大会発表論文・資料集: 10-13.
- 陸軍省 1893.『工兵操典』第五冊測量 川流堂.
- 陸軍大臣寺内正毅 1904. 陸軍大臣より高等工芸に関する学術を修めたる者の使用の件. 陸軍省『明治 38 年 1, 2 月分 副臨号書類綴 大本營陸軍副官』JACA (アジア歴史センター) Ref.C06040702100 (防衛庁防衛研究所) .
- 陸地測量部作製 1985.『旧満洲五万分の一地図集成』科学書院.